# 令和２年度
# 茨城大学 社会連携センター 年報

**令和３年３月**

## 令和２年度 茨城大学社会連携センター活動

１．茨城大学の地域連携に関する基本方針と推進体制

２．新たな取り組み
（１）新型コロナウィルスに対する全学的な対応
（２）アントレプレナーシップ教育プログラム　【資料１】

３．地域連携に関する主な事業
（１）起業セミナー・ビジネスプランコンテスト　【資料２】
（２）女性の地域参画促進セミナー　【資料３】
（３）各種プロジェクトおよび学生の地域活動支援
①「戦略的地域連携プロジェクト」　【資料４】
②「地域連携・地域研究プロジェクト　【資料４】
③「学生地域参画プロジェクト」　【資料５】
④ 学生の地域連携活動の発表会の実施
⑤学生パートナー
（４）リカレント教育プログラム　【資料６・７・８】
（５）社会教育・生涯学習事業
（６）連携自治体との意見交換会　【資料９】
（７）社会連携センターからの情報発信

４．企業・産業界との連携
茨城産業会議との連携事業

５．自治体・地域等との連携
（１）茨城県議会と大学との連携協定を締結
【資料１０】
（２）筑西市と大学との連携協定を締結
【資料１１】

６．社会連携活動の充実
点検評価　【資料１２】

# 1．茨城大学の地域連携に関する基本方針と連携体制

## 地域連携の基本方針

茨城大学は大学憲章の下、地域課題の把握に努め、地域と連携した教育と研究を推進し、地域に貢献できる人財と知を還元するという使命を果たします。多様化の時代の中、様々なステークホールダーと直接的なつながりを強化し、スピード感をもった組織的な連携取組みにより地域社会の発展に貢献します。

## 地域連携の推進体制

**茨城大学**

大学憲章　①地域課題の把握
②連携した教育と研究
③人財・成果・知の還元

理事（社会連携）　大学執行部会議

地域連携統括会議
（次年度 地域連携推進委員会）

・地域連携の方針
・活動情報の共有
・連携活動の調整
・中期目標中期計画の進捗把握
・内部質保証の推進

**地域社会**

産業界
市民
教育機関
研究機関
自治体

# 2．新たな取り組み

## （1）新型コロナウィルス対応について

茨城大学では、感染症対策を図りながら、大学の新しいスタンダードをみんなで考え、語り、展望し、実践する。
それらの前向きな取り組みを「IBADAI new STANDARD」と呼び、キャンパス内に新たな世界に羽ばたく鳥をイメージした「IBADAI new STANDARD」のデザインとともに、「マスク着用」「手洗い」「手指消毒」「ソーシャルディスタンシング」「NO密集」「換気」といった感染症対策を促すサインを設け、実践しています。

IBADAI new STANDARD

## （2）アントレプレナーシップ教育プログラムについて

⇒【資料１】

アントレプレナーシップ（起業家精神）を有する人財を育成するため、茨城大学と茨城県が連携し、「いばらきに豊かさを生み出す起業家・社内起業家精神の育成」をテーマにした新たな教育プログラムを、2021年10月から実施します。

### 育成する人財像

① 新たな価値を事業化するための基礎的知識・技能を持った人財

② 地域や企業内から新たな価値を見出し、ビジネスによりその価値を高めようとするマインドを持った人財

③ 失敗を恐れずに新たな価値の創出に挑戦する行動力及び分析力を持った人財

## ３．地域連携に関する主な事業

### （１）起業セミナー・ビジネスプランコンテスト

①起業セミナー「あつまれ　起業家のたまごたち」⇒【資料２】

「若手起業家育成のための事業」として、地域社会で活躍する起業家・社内起業家精神の育成を目指し、ノウハウや方法論よりもマインド育成に重点を置いた若者向けの無料公開講座を、オンラインで開催しました。

【ライブ配信】
・11月29日（日）…大学生等10人、高校生　2人、その他1人、計13人参加
・12月　6日（日）…大学生等　7人、高校生12人、その他1人、計20人参加
【アーカイブ配信】
・12月22日～1月31日…137回再生

②茨城県学生ビジネスプランコンテスト

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により、本年度は開催を中止しました。

## （２）女性の地域参画の促進に向けたセミナー

「地域に活力を与える女性たち」　⇒【資料３】

本セミナーは、女性の地域参画について考えてもらおうと、茨城大学社会連携センターとダイバーシティ推進室が主催し、地域の方や本学の学生・教職員あわせて40名が参加した。後日、パートナー企業様や本学学生・教職員向けにオンデマンド配信も行い、45回視聴された。

パネリスト

・光畑 由佳 氏
　モーハウス Mo -House代表／
　NPO 法人子連れスタイル推進協会
　代表理事

・坂本 敬子 氏
　（株）月の井酒造店代表取締役

・安達 美和子 氏
　茨城県女性活躍・県民協働課課長

## （３）各種プロジェクト及び学生の地域活動支援

### ①「戦略的地域連携プロジェクト」　⇒【資料４】

「教員＋自治体」が協働で進める研究を支援しています。

令和２年度より、「地域研究・地域連携プロジェクト」と統合しました。

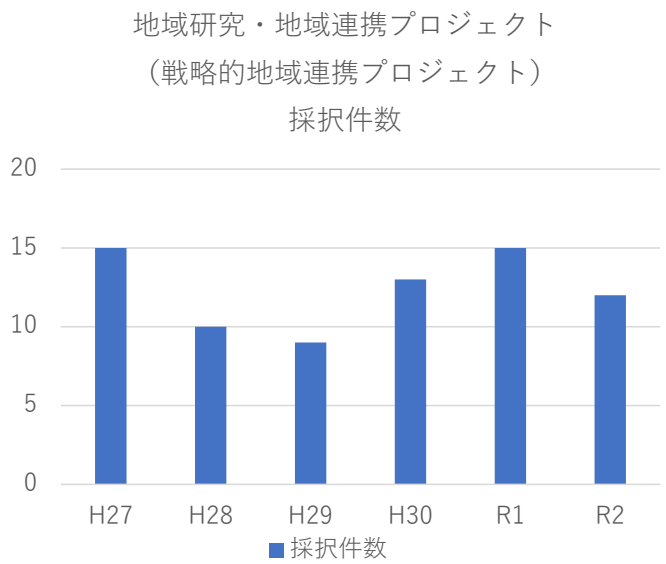
※令和元年度以前の報告書は、社会連携センターHPよりご覧ください。

### ②「地域研究・地域連携プロジェクト」

⇒【資料４】

「教員+自治体等」が協働で
地域課題解決を目的として進める
研究や事業を支援しています。
（令和２年度：12件）

※令和元年度以前の報告書は、
社会連携センターHPよりご覧ください。

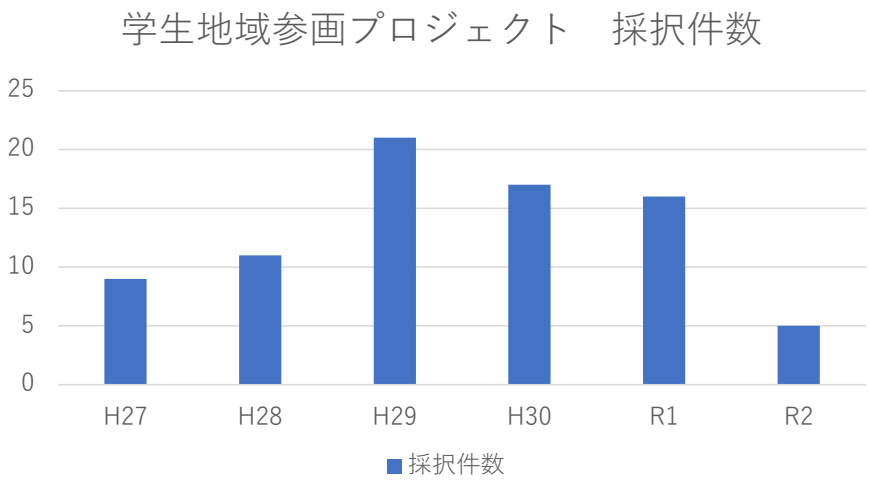


## ③「学生地域参画プロジェクト」（令和２年度　５件）　⇒【資料５-1】

学生が自主的に地域で行う活動を「学生地域参画プロジェクト」として選定し、
予算の補助や、活動に関し、コーディネーターによる助言等を行っています

年度末に、発表会での発表と活動報告の提出を行い、『報告書』を作成しています

※令和元年度以前の報告書は、社会連携センターHPよりご覧ください。




## ③学生地域参画プロジェクト

### ・地域活動団体との新入生懇談会　⇒【資料5-2】

学生地域参画プロジェクト団体をはじめとした
地域で活動する団体の活動発表及び新入生との交流会。
※新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響による
学生地域参画プロジェクトの公募延期を踏まえて実施。
２日間で全10団体、38名が参加。

### ・令和３年度学生地域参画プロジェクトのプレ企画

令和３年度学生地域参画プロジェクト及び地域連携事業の
推進につなげることを目的とし、2つの企画を実施した。

企画①茨大生×地域の名産品オンラインワークショップ

・3月１８日（木）　１３：３０～

企画②茨城大学×水戸ホーリーホック eスポーツ交流会

・3月9日（火）　１７：００～

## ④学生の地域連携活動の発表会の実施

年２回の発表会を実施しています。

春：「はばたく！茨大生」〔全学教育機構主催〕

学生から学生たち（特に新入生）への活動発表

（※令和２年度は、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響を受けて中止しました。）

冬：「学生地域参画プロジェクト活動発表会」〔社会連携センター主催〕

学生地域参画プロジェクト活動団体の活動発表

（令和３年３月１６日にオンラインで開催しました。）

## ⑤社会連携センターの企画・運営に関わる「学生パートナー」

令和２年度は６名が登録し、「学生地域参画プロジェクト」のPR活動としてポスターの作成や、自治体との意見交換会への陪席、学生地域参画プロジェクト活動発表会のや司会等を行い、社会連携センターの事業の運営に協力しました。

## （４）リカレント教育プログラム

茨城大学社会人向け「リカレント教育プログラム」は下記「３コース」で構成

★オープンコース（公開講座・公開授業）・・・誰でも１科目単位で自由に学べる

→全講座・全授業の開講を2020年度中止。

★専門コース・・・専門分野のエッセンスを複数の科目を受講して学ぶ

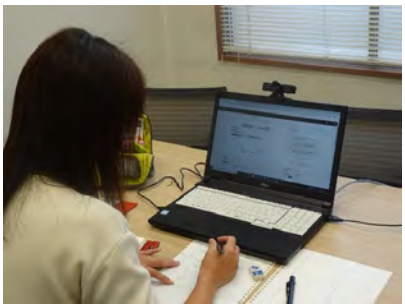
→ 2020年度に開講を予定していた講座は中止又は開講時期変更。

◎時期及び規模を縮小して以下の２つをオンラインで開講。

・「令和２年度茨城エコ・カレッジ（体験コース）」
　環境問題に興味を持ち、環境保全の活動を進んで実践するリーダーを養成するためのコース　⇒【資料６】
　（主催：茨城県、茨城大学、定員100名、修了者69名）

・「2020年度多文化理解パートナー育成講座～茨城の多文化共生を考える～」
　2019年4月の出入国管理及び難民認定法の改正を受け、今後増加が予想される在留外国人へ、地域住民ができる支援について考える講座⇒【資料７】
　（主催：茨城大学、後援：茨城県、定員100名、申込数155名）
　本講座に参加した受講者向けに「ふりかえりセッション」と題し，オンラインイベントを開催予定
→本講座に参加した団体代表等と受講者のディスカッションを含むオンラインイベントを3月13日に開催

★カスタムコース・・・企業や自治体、団体等の要望に応じて人材育成のプログラムをカスタマイズして提供



2020年度前期（４月～８月）

→新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で開講中止。

2020年度後期（９月～）参加企業・団体及び参加人数

・関彰商事　・・・　13名
・那珂市　・・・　６名
・水戸ヤクルト販売株式会社　・・・　３名
・NTT東日本茨城支店　・・・　２名

◎新型コロナウイルス感染症（COVID-19）への対応としてオンライン上で講義に参加していただいています。

◎「いばらき社会人リカレント教育懇談会」の実施　⇒【資料８】
「社会人リカレント教育」に関する意見交換を関係団体と行い、プログラムに反映させながら進めています。
意見例：カスタムコース参加団体間の交流会実施希望

→本学対応：2021年3月15日に受講者交流会実施

## （５）社会教育・生涯学習事業

社会連携センターでは全国、県内の生涯学習関係　団体、県内生涯学習センター等と協力しています。

・「いばらき子ども大学」への協力
大学、NPO法人、企業や市町村等の連携により、小学校4～6年生を対象に授業を展開するものです。
→例年会場として施設貸出や講師派遣をしてきましたが、2020年度は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で中止となりました。

・第6回関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会への参加
新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が感染拡大している状況下で、生涯学習・社会教育の分野で何ができるかを考える場を提供し、今後の実践に活かすことを目的に実施します。
→ 2020年度は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で中止となりました。
（オンデマンド配信の事業のみ実施。）

## （６）連携自治体との意見交換会　⇒【資料９】

茨城大学と連携協定を締結している自治体の実務者と共に、
地域活性化のための連携事業を更に進めていくための場として意見交換会を開催する。

令和２年度は、２月３日（水）に、オンラインで開催。
全体での開会のあと、以下３つのグループに分かれて
意見交換を行った。
・「地域連携」、
・「ワーク・ライフ・バランス～女性活躍の視点から～」
・「国際交流・多文化共生」

## （７）連携自治体との意見交換会

メールマガジン「社会連携センターニュース」を毎月１回送信しています。
FacebookやTwitter、HPを活用した情報発信を行いました。

## ４．企業・産業界との連携

### 茨城産業会議との連携事業

・茨城産業会議と茨城大学との懇談会の開催（7月15日（水））

茨城産業会議より、連携事業の実施案と事業活動方針について報告があり、本学からは連携講演会の開催（案）、研究室訪問交流会（案）及び社会人リカレント教育の展望について報告しました。

続いて、本学の太田寛行学長より「茨城大学の特色ある取り組み～SDGsをめぐって～」と題して、本学の取り組みをSDGsからの視点で紹介しました。

意見交換では、本学の卒業生の県内企業への就職状況や霞ヶ浦の水質改善に向けた取り組み、令和元年度の台風19号災害時における災害支援活動等について、質問・意見が活発に交わされました

・茨城大学・茨城県・産業会議連携講演会
例年開催していた連携講演会については、開催テーマ及び開催時期等について打合せ及び検討を進めていましたが、新型コロナウイルス感染症拡大の状況等を鑑みまして、開催を見送りました

令和元年度「三者連携講演会」

## ５．自治体・地域等との連携

（１）茨城県議会と大学との連携協定を締結　⇒【資料１０】
9月24日（木）に包括連携協定を結びました

（２）筑西市と大学との連携協定を締結　⇒【資料１１】
12月22日（火）に包括連携協定を結びました

# ６．社会連携の充実

点検評価

・アドバイザリーボード会議を開催　⇒　【資料１２】

3月25日（木）に会議を開催しました。令和2年度の活動全般及び特色ある活動について説明ののち意見交換が行われ、ご意見・ご助言をいただきました。

## アントレプレナーシップを有する人財の必要性 ～「新しい茨城」への挑戦～

人口減少社会が進行し、茨城県をとりまく環境が大きく変化する中、茨城県総合計画が基本理念とする「活力があり、県民が日本一幸せな県」を実現するためには、多様な主体との緊密な連携のもと、新たな発想で、失敗を恐れずに果敢に挑戦する姿勢が必要です。

茨城大学と茨城県では、「活力があり、県民が日本一幸せな県」に向けて、茨城の未来をつくる起業家・社内起業家を輩出するため、新しい事業の創造意欲に燃え、高いリスクに果敢に挑む姿勢（アントレプレナーシップ）を有する人財を育成します。

## アントレプレナーシップ人財の育成

茨城大学と茨城県が連携し、「いばらきに豊かさを生み出す起業家・社内起業家精神の育成」をテーマにした新たな教育プログラムを、2021年度から実施します。

プログラムを通して能力や考え方を身に付けた学生が、茨城県内の企業や地域などに新たな豊かさをもたらすことを目指します。

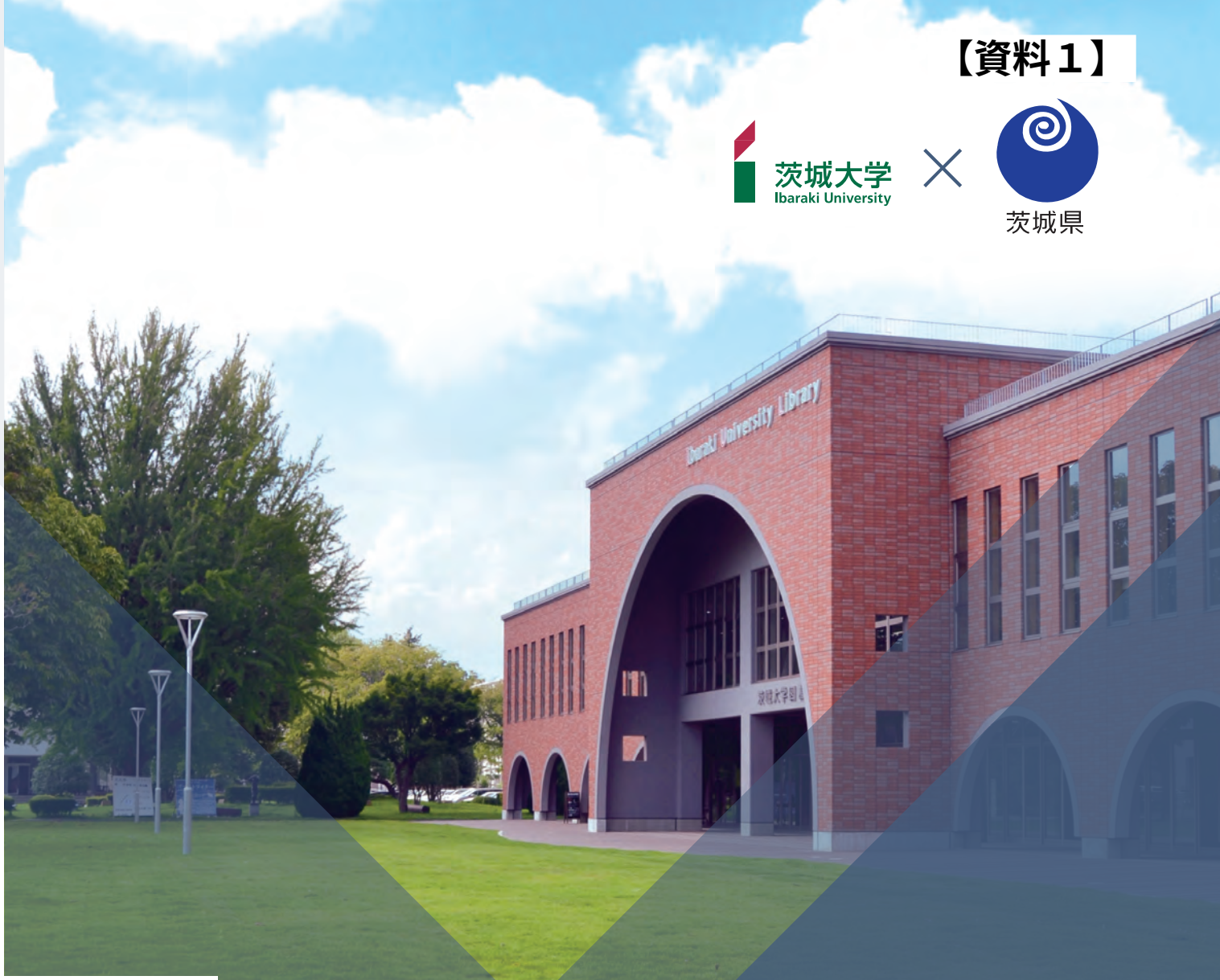
### 育成する人財像

1. 新たな価値を事業化するための基礎的知識・技能を持った人財
2. 地域や企業内から新たな価値を見出し、ビジネスによりその価値を高めようとするマインドを持った人財
3. 失敗を恐れずに新たな価値の創出に挑戦する行動力及び分析力を持った人財

※本プログラムでは、社会に輩出する学生を地域に貢献する宝だと考え、「人材」ではなく「人財」と表記しております。

【資料１】

茨城大学 Ibaraki University × 茨城県




# アントレプレナーシップ教育プログラム

### お問い合わせ先

茨城大学 研究･社会連携部 社会連携課
〒310-8512 茨城県水戸市文京2丁目1番1号
TEL：029-228-8605
FAX：029-228-8495
Mail：entre-jimu@ml.ibaraki.ac.jp

## 茨城大学の人財養成像

茨城大学では、すべての学生が卒業するまでに身に付けるべき5つの知識・能力「ディプロマ・ポリシー」を定めています。

企業様のご協力をいただきながら本プログラムを実施することで、さらにアントレプレナーシップ人財としての精神を身に付けた「次世代を担う、高いマインド/スキルを持った新しい人財育成」を目指します。

### ディプロマ・ポリシー
［5つの茨城大学型基盤学力］

- 世界の俯瞰的理解［世界を見わたす］
- 専門分野の学力［道を究める］
- 課題解決能力・コミュニケーション力［ともに答えを導く］
- 社会人としての姿勢［社会人として生きる］
- 地域活性化志向［地域と向き合う］

＋

### アントレプレナーシップ教育プログラム

- 企画力の育成
- 課題発見・解決能力の育成
- 地域経済の理解
- 地域課題解決、地域活性化志向の醸成　など

## プログラムの実施内容・体制

起業家の講演や課外活動を積極的に取り入れながら、「入門」、「基礎」、「実践」の3段階のプログラムを実施します。

実効性のあるプログラム構築を目指し、企業様をはじめとする関係者の皆様とともに実施体制を創っていきたいと考えております。

| 2021.10月～ | 2022 | 2023 | 2024 |
|---|---|---|---|

**入門プログラム** / 基礎的マインドの醸成、起業家や企業様の講演など

**基礎プログラム** / 起業家として必要な知識・技能の習得、ビジネスプランコンテストへの参加など

**実践プログラム** / 知識の統合・活用、インターンシップ、起業体験など

## 企業様にご協力いただきたいこと

- 授業への講師・ゲストスピーカー派遣（経営者様・社員様）
- 学生との意見交換、メンター指導
- インターンシップ学生受入
- 企業内プロジェクトへの学生の参加
- プログラム運営のためのご寄付

### 期待される効果

#### プログラム実施中

- 学生との交流を通した企業課題の解決策提案
- 若者感覚の取り入れ
- 社員の意識・能力向上
- 教育活動への協力による企業のイメージアップ　など…

#### プログラム修了後

- ビジネス的視点を身に付けた学生数の増加
- 就職企業における企画力の発揮
- 新規起業数の増加
- 地域経済の活性化　など…

【資料２】

地域社会で活躍する人材育成に関するプロジェクト・起業セミナー

# あつまれ！起業家のたまごたち

## ビジネスの
## はじめの一歩を踏み出そう！

起業やビジネスに興味はあるけれど、
自分には難しそうだと思っているあなた…

大学教授や起業家の講演を聞いて１から学びましょう！
ビジネスの面白さに触れ、視野を広げる、そんな

**はじめの一歩のオンラインセミナーです！**

▶ 開催日時

**令和2年11月29日(日)** 14時00分～16時15分
**令和2年12月6日(日)** 14時00分～16時15分

## Zoomによるライブ配信

▶ 受講対象

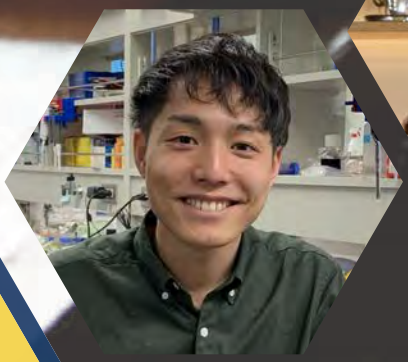
少しでもビジネスに興味のある
大学生・高校生・中学生　等

講師

今村 一真
茨城大学
人文社会科学部 教授

光畑 由佳
モーハウスMo-House

伊藤 俊一郎
株式会社 リーバー



髙橋 健太
株式会社 Dinow

■ 定　　員　90名(先着順)

■ 受 講 料　無料

■ 申込方法

茨城大学リカレント教育プログラム公開講座
ホームページ内フォーム(専門コース起業セミナー)
よりお申込みください。

■ 応募締切

令和2年11月23日(月)

■ その他

・講演の模様は録画してアーカイブを一定の期間配信します。
・アーカイブ配信の視聴には定員はありません。

【問い合わせ先】
茨城大学社会連携センター（029-228-8413）

主催：茨城大学
後援：茨城県教育委員会

茨城大学社会連携センター

申込フォーム
QRコード

令 和 3 年 2 月 16 日
茨城大学社会連携センター

地域社会で活躍する人材育成に関するプロジェクト・起業セミナー
あつまれ 起業家のたまごたち　報告書

＜目的＞
「若手起業家育成のための事業」として、地域社会で活躍する起業家・社内起業家精神の育成を目指し、ノウハウや方法論よりもマインド育成に重点を置いた、若者向けの無料公開講座を開催しました。

【到達目標】
受講者が、自分でビジネスプランをつくりたいと考えるようになることを目指しました。
そのために受講者が、「ビジネス的な物事の見方ができるようになる」、「ビジネスに対する興味関心を持つようになる」ことを目標とし、ビジネスについて基礎的な事項から学びました。

＜受講対象＞
大学生、高校生、中学生等
※高校、中学校の教員も視聴可

＜実施方法＞
新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の状況に関わらず開催できるよう、オンラインで実施しました。

【概要】

<table>
<tr><th></th><th>講師</th><th>内容</th><th>方式</th><th>日付</th><th>時間</th></tr>
<tr><td>1</td><td>今村　一真　教授<br>茨城大学人文社会科学部</td><td>総論</td><td rowspan="4">Zoom による講演＋質疑応答<br>※講演部分の録画を、アーカイブとして動画配信</td><td rowspan="2">11/29(日)</td><td>約 60 分</td></tr>
<tr><td>2</td><td>髙橋　健太　様<br>(株)Dinow 代表取締役</td><td rowspan="3">起業体験談・ビジネスモデルの紹介</td><td>約 60 分</td></tr>
<tr><td>3</td><td>光畑　由佳　様<br>モーハウス Mo-House 代表</td><td rowspan="2">12/6(日)</td><td>約 60 分</td></tr>
<tr><td>4</td><td>伊藤　俊一郎　様<br>(株)リーバー代表取締役</td><td>約 60 分</td></tr>
</table>

＜講演内容＞

| | |
|---|---|
| 目　　標 | 受講者が「ビジネス的な物事の見方ができるようになる」、「ビジネスに対する興味関心を持つようになる」こと |
| 方　　式 | Zoom による講演（約 40 分）＋質疑応答（約 20 分）<br>※講演部分の録画を、アーカイブとして動画配信 |
| 定　　員 | 90 人<br>※アーカイブの視聴は人数制限なし |
| 内　　容 | 【総論】<br>・ビジネスモデルとは何か<br>・様々なビジネスモデル<br><br>【起業体験談・ビジネスモデルの紹介】<br>・自社のビジネスモデル<br>・アイデアのきっかけ<br>・ビジネスの楽しさ<br>・起業に至ったきっかけ |

＜周知方法＞

・茨城大学ホームページ、Facebook、Twitter へ掲載
・茨城大学教務情報ポータル掲示板へ掲載
・いばらき地域づくり大学・高専コンソーシアム会員校へメール
・県内公私立高校・中学へメール
　（県庁主管課経由）
・水戸市近辺の高校を訪問（18 校）
・水戸市内施設へチラシ設置
　（M-WORK、マチノイズミ）

※「企業やビジネスに興味はあるけれど、自分には難しそうだと思っているあなた」、「受講対象：少しでもビジネスに興味のある大学生・高校生・中学生等」など、ビギナー層をターゲットとしたチラシを作成して周知した。

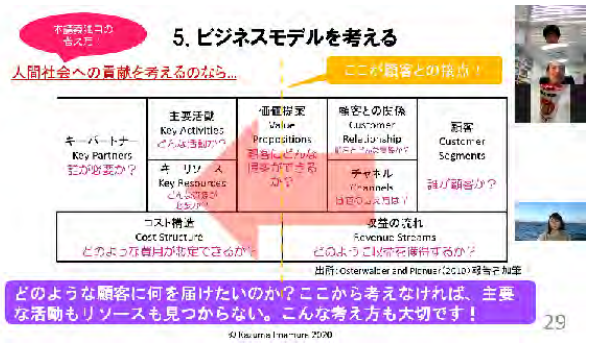
**＜当日進行＞**

11 月 29 日（日）

| 時間 | 項目 | 担当者 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 14:00～14:05 | 開会 | 茨城大学職員 | |
| 14:05～15:05 | 講演① | 今村　一真　教授 | 講演（約 40 分）<br>事前質問・当日質問への回答（約 20 分） |
| 15:05～15:10 | 休憩 | 茨城大学職員 | 「アントレプレナーシップ（起業家精神）育成についての茨城大学の取組」の紹介動画を再生 |
| 15:10～16:10 | 講演② | 髙橋　健太　様 | 講演（約 40 分）<br>事前質問・当日質問への回答（約 20 分） |
| 16:10～16:15 | 閉会 | 茨城大学職員 | |

12 月 6 日（日）

| 時間 | 項目 | 担当者 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 14:00～14:05 | 開会 | 茨城大学職員 | |
| 14:05～15:05 | 講演① | 光畑　由佳　様 | 講演（約 40 分）<br>事前質問・当日質問への回答（約 20 分） |
| 15:05～15:10 | 休憩 | 茨城大学職員 | 「アントレプレナーシップ（起業家精神）育成についての茨城大学の取組」の紹介動画を再生 |
| 15:10～16:10 | 講演② | 伊藤　俊一郎　様 | 講演（約 40 分）<br>事前質問・当日質問への回答（約 20 分） |
| 16:10～16:15 | 閉会 | 茨城大学職員 | |




講演の様子（今村教授）

「茨城大学の取組」紹介動画

＜アーカイブ配信＞
令和 2 年 12 月 22 日～令和 3 年 1 月 31 日
茨城大学リカレント教育プログラム・公開講座ホームページ内で公開

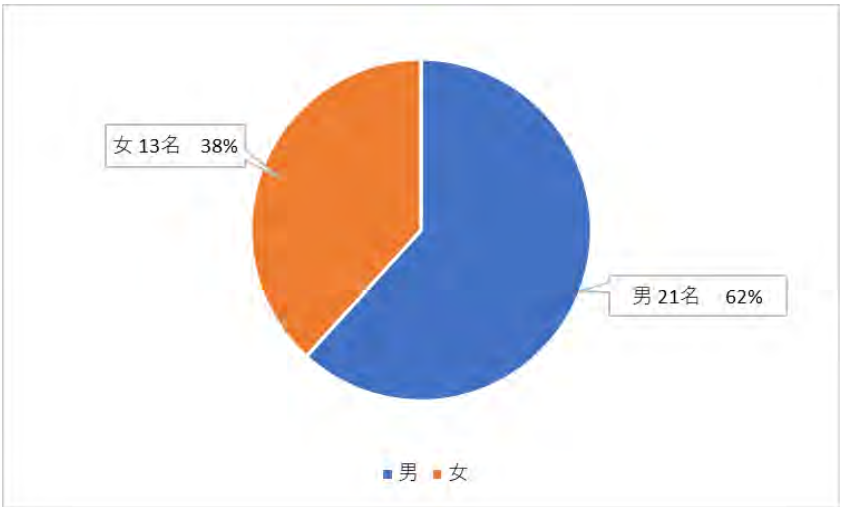
＜受講者数等＞

| 【申込】 | ライブ配信 | | アーカイブ配信 |
|---|---|---|---|
| | 11 月 29 日 | 12 月 6 日 | |
| 大学生等 | 28 人 | 22 人 | 35 人 |
| 高校生 | 3 人 | 12 人 | 4 人 |
| 中学生 | 0 人 | 0 人 | 0 人 |
| その他 | 1 人 | 1 人 | 3 人 |
| 合計 | 32 人 | 35 人 | 42 人 |

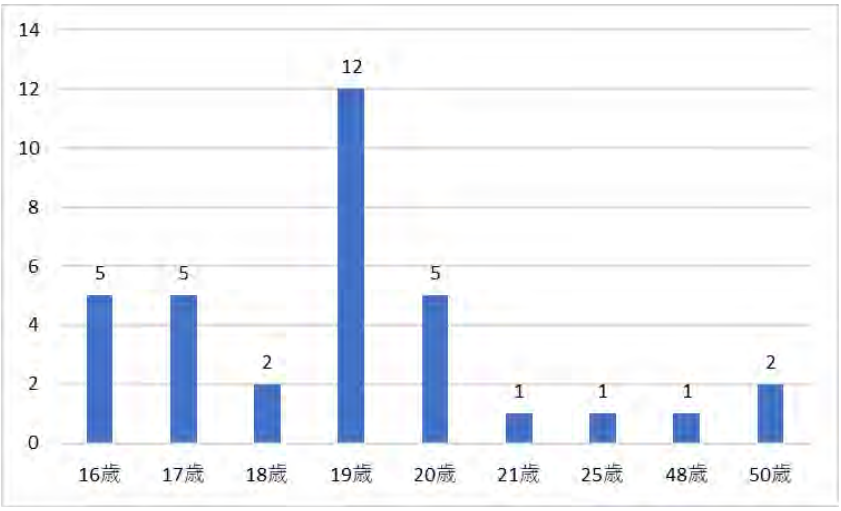
| 【実績】 | ライブ配信 | | アーカイブ配信 |
|---|---|---|---|
| | 11 月 29 日 | 12 月 6 日 | |
| 大学生等 | 10 人 | 7 人 | |
| 高校生 | 2 人 | 12 人 | |
| 中学生 | 0 人 | 0 人 | |
| その他 | 1 人 | 1 人 | |
| 合計 | 13 人 | 20 人 | 137 回再生 |

※ライブ配信を受講した「大学生」のうち茨城大学所属が 12 人、「高校生」のうち県央地区以外の高校所属が 11 人（所属大学名・高校名は申込時に任意回答）

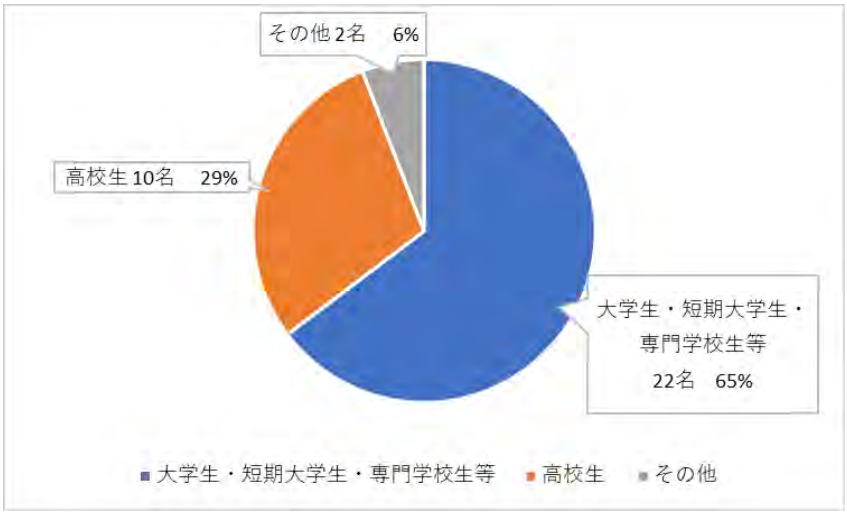
＜アンケート結果（ライブ配信・アーカイブ配信合計）＞
Q1.性別を教えてください



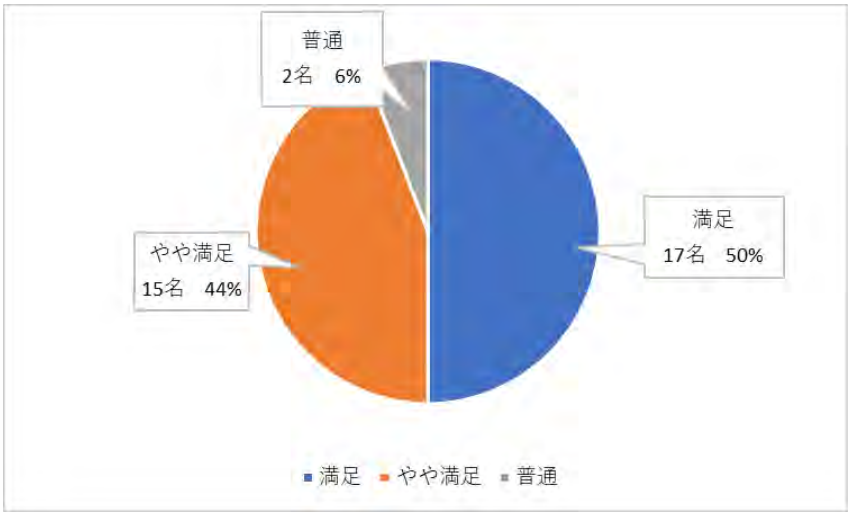
Q2.年齢を教えてください




Q3.ご所属を教えてください

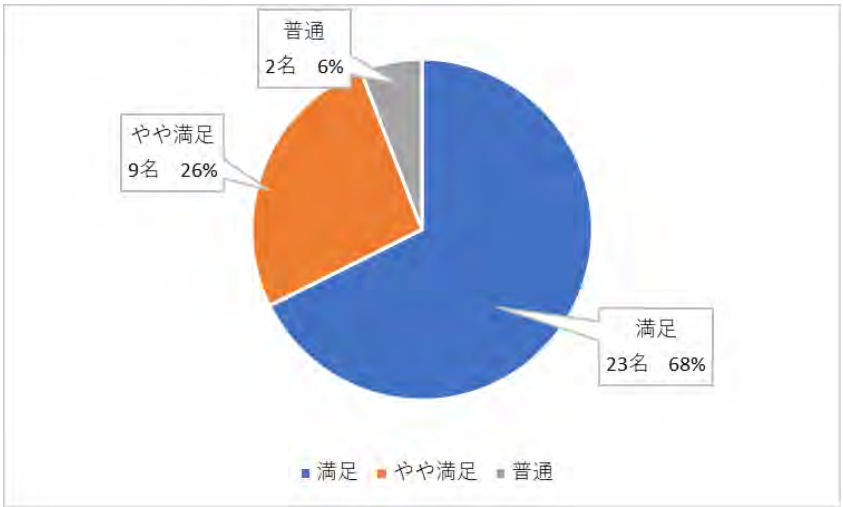



Q4.本セミナーの講演内容について満足度を教えてください



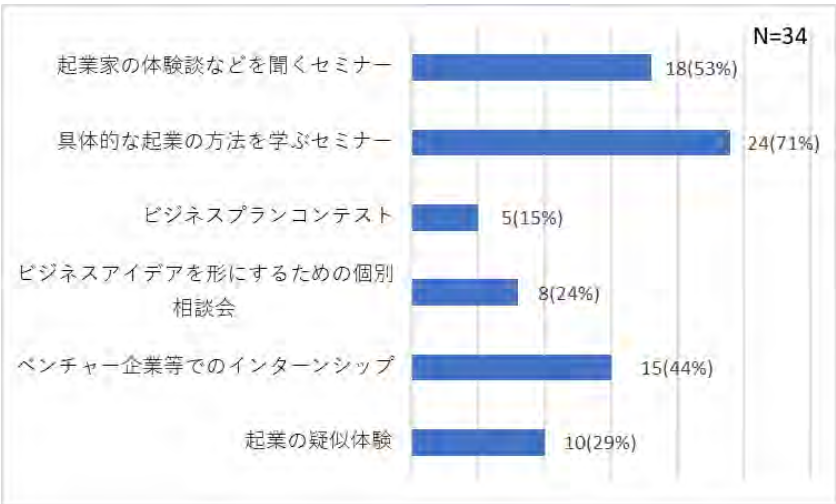
Q4-2.「やや不満」「不満」を選択された方は、理由をお聞かせください（自由記述）
・回答なし

Q5.本セミナーの実施方法について満足度を教えてください




Q5-2. 「やや不満」「不満」を選択された方は、理由をお聞かせください（自由記述）
・回答なし

Q6.アントレプレナーシップ育成に関する取り組みで、興味があるものを教えてください
（複数回答可）




Q7.今後受講してみたい講座があればお聞かせください。（自由記述）
・起業の失敗談

・失敗するのが当然と言われていたが、失敗を避ける方法をやはり考えると思われるので、そういった方法はどのように思考するのか聞いてみたいと思いました。

Q8.本セミナーを通じて感じたこと、要望やご意見などをお聞かせください。（自由記述）

・軽い気持ちで参加したが、とてもためになった。特にビジネスモデルの考え方と実際に起業した人の経験談を聞くことが出来て良かったと感じた。

・どこから手をつけたら良いか分からなかったものの輪郭が見えた気がした。ひとまず、簿記・会計・会社法などについて学び、学生のうちに検証まで持っていければと思う。

・書店では、当セミナーのテーマである「起業」に関する出版物が多数あるが、実際どれを読んだり、参考にしたら良いかわからないこともあった。
そこで今回、大学でこのような機会があることを学内メールで知ったので、軽い気持ちで参加してみた。それぞれ、置かれている状況や専門が異なる 4 人の方々の講演を聞き、「起業」に対する考えや視点を自分の中でまとめるきっかけになったと感じた。
このような若手（学生）向けのセミナーがあったら、また、ぜひ参加してみたい。

・失敗してもそれをただ失敗で終わらせず、経験とみなすポジティブなマインド・諦めない心は皆さん共通しているように感じました。スティーブ・ジョブスの「Connecting the dots」という言葉もあるように、今できることに精一杯取り組み、将来社会の役に立てる人材になりたいと思いました。

・5000 円から起業した方もいれば、何百万円も借金して起業した方もいて、色んな形があるのだなと参考になった。

・偶然とマインド、あきらめないなどという秘訣を伺うことができ、知識だけでない部分の力も大きく影響していることを感じました。

・新たな視点を見つけられたと思います。ありがとうございました。

・起業の在り方考え方など触れる貴重な時間をありがとうございました

・今後何をすべきかわかりました。

・失敗についての考え方に共感しました。

・やはり企業のジャンルは多種多様だなと感じました。

・起業に失敗した話も聞いてみたいと思った。

・カメラ ON 推奨であれば、事前に通知していただけるとありがたい。

＜考察等＞

・アンケート Q4「講演内容について満足度」で、「満足」及び「やや満足」の回答が 94%を占め、「不満」及び「やや不満」の回答が 0%だった。
また、Q8「本セミナーを通じて感じたこと」で、「軽い気持ちで参加したが、とてもためになった」、「どこから手をつけたら良いか分からなかったものの輪郭が見えた気がした」といった回答が見られた。
これらのことから、狙いどおり、ビギナー層をターゲットとした講演により高い満足度を得るとともに、ビジネスに対する興味関心を引き立てることができたものと考えられる。

・アンケート Q5「実施方法について満足度」で、「満足」及び「やや満足」の回答が 94%を占め、「不満」及び「やや不満」の回答が 0%だった。
また、ライブ配信を受講した「高校生」14 人のうち県央地区以外の高校所属が 11 人を占めた。
これらのとおり、オンライン実施による低満足というデメリットは見られず、遠方からでも受講しやすいというメリットが目立った。
一方で、Q8 で「カメラ ON 推奨であれば、事前に通知していただけるとありがたい」という回答があり、細かな運営方法についてはさらに改善を図る必要がある。

・ライブ配信を受講した「大学生」17 人のうち茨城大学所属が 12 人を占めた。茨城大学生の受講者数の割合が多いことから、本セミナーを、令和 3 年度後期から開始する「アントレプレナーシップ教育プログラム」への導入として位置づけることは妥当であると考えられる。
そのため、次回開催にあたっては、本セミナーを受講した茨城大学生が後期の履修登録に間に合う時期設定とする必要がある。
また、本セミナー受講者に教育プログラムの告知を行う際には、アンケート Q6「アントレプレナーシップ育成に関する取り組みで、興味があるもの」で「具体的な起業の方法を学ぶセミナー」の回答が最も多いことを踏まえて、内容を検討するとよいと考えられる。

女性の地域参画の促進に向けたセミナー
「地域に活力を与える女性たち」の開催について

社会連携課

11 月 11 日（水）に女性の地域参画の促進に向けたセミナー「地域に活力を与える女性たち」が茨城大学駅南サテライトにて開催された。本セミナーは、女性の地域参画について考えてもらおうと茨城大学社会連携センターと茨城大学ダイバーシティ推進室が主催し、地域の方や本学の学生・教職員あわせて 40 名が参加した。

セミナーでは様々な分野で活躍する女性３名をパネリストにお迎えした。セミナー前半は、各パネリストから今の仕事をするきっかけやこれからどのような仕事をしていきたいか等をご自身の経験談を中心にお話しいただいた。後半は、木村美智子ダイバーシティ推進室長がファシリテーターを務めフリートークを行った。フリートークでは、自分の仕事が地域や社会に与える影響やワークライフバランスの充実などについてそれぞれの立場で語っていただいた。

セミナー終了後のアンケートでは、「大変な苦労もあったと思うが 3 人とも輝いている。自分も頑張ろうと思った。」など、参加者の多くから満足の感想が寄せられたことから、本セミナーが女性の地域参画や現代の女性の働き方について考えるきっかけになったことがうかがわれた。

パネリスト

・光畑　由佳 氏　モーハウス Mo-House 代表／NPO 法人子連れスタイル推進協会代表理事

・坂本　敬子 氏　（株）月の井酒造店代表取締役

・安達美和子 氏　茨城県女性活躍･県民協働課課長

3名のパネリストがフリートークを行う様子

木村ダイバーシティ推進室長がパネリストに質問をする様子

# 戦略的地域連携プロジェクト

## H27

| 事業責任者 | | | プロジェクト名 |
|---|---|---|---|
| 自治体等 | 茨城大学 | | |
| 連携先 | 所属・職名 | 氏名 | |
| 茨城県教育庁義務教育課 | 教育学部・教授 | 松川　覚 | いばらき理科教育支援プロジェクト |
| 茨城町総務企画部新政策審議室 | 教育学部・准教授<br>准教授 | 大辻　永<br>石島　恵美子 | ラムサール条約登録予定湿地　涸沼のワイズユース等に関する事業 |
| 大子町まちづくり課 | 農学部・准教授 | 牧山　正男 | 大子町・移住定住促進プロジェクト2015 |
| 茨城県生活協同組合連合会<br>保健福祉部福祉指導課 | 人文学部・教授 | 井上　拓也 | 孤独死防止を中心とする見守り活動の推進についての研究 |
| ひたちなか市都市整備部都市計画課 | 工学部・准教授 | 村上　哲 | 低平地における液状化対策工法の効果の検証 |
| 水戸市公園緑地課 | 工学部・准教授 | 藤田　昌史 | 地域連携による千波湖のアオコ抑制プロジェクト |
| 阿見町教育委員会学校教育課 | 農学部・教授 | 安江　健 | 学校と田畑をつなぐ地域サポート農学プロジェクト<br>－あみ食育の新展開に向けて－ |
| 常陸大宮市市民協働課 | 人文学部・教授 | 西野　由希子 | 常陸大宮市民みんなが主役「音楽による」まちづくりプロジェクト |
| 北茨城市市長公室企画政策課 | 五浦美術文化研究所・所長 | 小野寺　淳 | 天心遺跡を拠点とした広域美術文化圏構想の萌芽的基礎研究<br>-北茨城市立富士ケ丘小学校の廃校に伴う利活用を起点として |
| 水戸教育事務所 | 教育学部・教授 | 三輪　壽二 | 不登校児童生徒支援事業「ほっとステーション活動」 |
| ひたちなか市福祉部健康推進課 | 教育学部・准教授 | 上地　勝 | ひたちなか市元気アップ事業向上プロジェクト |
| 大洗町役場まちづくり推進課 | 人文学部・教授 | 伊藤　哲司 | 町の職員・町民・学生が共に学ぶ「市民協働の町大洗」実現に向けた地域人材育成事業 |
| 東海村役場建設農政部 | 工学部・准教授 | 村上　哲 | 東海村地盤情報データベースの構築 |
| 茨城県土木部 | 工学部・准教授 | 原田　隆郎 | 地域に根付いた高度なメンテナンス技術者の育成と人的ネットワーク形成 |
| 高萩市役所企画部 | 人文学部・教授<br>准教授<br>准教授 | 斎藤　義則<br>小原　規宏<br>添田　仁 | 茨城県北中山地域における地域資源を活用した「自給的くらし」の伝承と「起業支援」プログラムの設立に関する実践的研究 |

## H28

| 事業責任者 | | | プロジェクト名 |
|---|---|---|---|
| 自治体等 | 茨城大学 | | |
| 連携先 | 所属・職名 | 氏名 | |
| 茨城町 | 人文学部・教授 | 西野　由希子 | 寺子屋プロジェクト |
| 茨城県生活協同組合連合会<br>茨城県生活環境部 | 人文学部・教授 | 井上　拓也 | 高齢者消費者被害防止のための連携の推進と見守り力の向上に関する研究 |
| 茨城県教育委員会義務教育課 | 教育学部・教授 | 松川　覚 | 続・いばらき理科教育支援プロジェクト |
| 高萩市市民生活部危機対策課 | 教育学部・教授 | 乾　康代 | 空家利活用体制整備支援事業 |
| 茨城県水戸教育事務所 | 教育学部・教授 | 三輪　壽二 | 不登校児童生徒支援事業「ほっとステーション活動」 |
| 那珂市教育委員会 | 教育学部・准教授 | 丸山　広人 | 児童生徒総合支援事業「麦の穂プロジェクト」 |
| 茨城町 | 教育学部・准教授 | 石島　恵美子 | ラムサール条約登録湿地　涸沼のワイズユース等に関する事業 |
| 茨城県土木部 | 工学部・准教授 | 原田　隆郎 | 地域に根付いた高度なメンテナンス技術者の育成と人的ネットワーク形成 |
| 水戸市公園緑地課 | 工学部・准教授 | 藤田　昌史 | 地域連携による千波湖のアオコ抑制プロジェクト |
| 茨城県農林水産部農地局農村環境課 | 農学部附属FS教育研究センター・教授 | 小松崎　将一 | 水鳥と共生する新しい霞ケ浦のレンコンづくりに関する研究 |

# 戦略的地域連携プロジェクト

## H29

| 事業責任者 | | | プロジェクト名 |
|---|---|---|---|
| 自治体等 | 茨城大学 | | |
| 連携先 | 所属・職名 | 氏名 | |
| ひたちなか市企画部企画調整課 | 人文社会科学部・教授 | 伊藤　哲司 | 旧那珂湊二高利活用検討・提案及び地域活性化事業 |
| 茨城県教育委員会義務教育課 | 教育学部・教授 | 松川　覚 | 続・いばらき理科教育支援プロジェクト |
| 茨城県水戸教育事務所 | 教育学部・教授 | 三輪　壽二 | 児童生徒支援モデル事業「ほっとステーション活動」 |
| 茨城町 | 教育学部・教授 | 渡部　玲二郎 | 茨城町ほっとステーション活動 |
| 那珂市教育委員会 | 教育学部・准教授 | 丸山　広人 | 児童生徒総合支援 |
| 常陸大宮市 | 理学部・教授<br>理学部・教授<br>人文社会科学部・教授 | 北　和之<br>岡田　誠<br>西野　由希子 | 自治体施設を利用した、茨城大学学修・地域交流促進プロジェクト |
| 日立市都市建設部都市政策課 | 工学部・准教授 | 熊澤　貴之 | 日立空家利活用プロジェクト |
| 日立市市長公室 地域創生推進課 | 工学部・助教 | 一ノ瀬　彩 | 日立・県北芸術祭フォローアップ アートプロジェクト |
| 土浦市役所市民生活部環境衛生課<br>阿見町役場町長公室国体推進室 | 農学部附属FS教育研究センター・教授 | 小松崎　将一 | 花いっぱい活動と連携した生ごみリサイクルの“見える化”プロジェクト |

## H30

| 事業責任者 | | | プロジェクト名 |
|---|---|---|---|
| 自治体等 | 茨城大学 | | |
| 連携先 | 所属・職名 | 氏名 | |
| ひたちなか市国際交流協会<br>大洗町国際交流協会<br>日立国際交流協議会 | 人文社会科学部　准教授 | 横溝 環 | 外国につながる児童生徒による多文化共生日本語スピーチコンテスト |
| 高萩市企画部地方創生課 | 教育学部　教授 | 乾 康代 | 空家予防と利活用促進のためのアクションリサーチ |
| 日立市都市建設部都市政策課 | 工学部　准教授 | 熊澤 貴之 | 日立空き家利活用プロジェクト |
| 茨城県水戸教育事務所 | 教育学部　教授 | 三輪 壽二 | 児童生徒支援モデル事業「ほっとステーション活動」 |
| 株式会社茨城ロボッツ･スポーツエンターテインメント | 理学部　教授 | 中村 麻子 | 茨城ロボッツとの連携による地域活性化促進プロジェクト |
| 那珂市教育委員会 | 教育学部　准教授 | 丸山 広人 | 児童生徒総合支援「麦の穂プロジェクト」 |
| 茨城県近代美術館天心記念五浦分館 | 教育学部　准教授 | 片口 直樹 | 大学と美術館の協働による文化事業の展開<br>－造形ワークショップ『金屏風に花を咲かせましょう』の実践から－ |
| キッズルーム･ばんびーに | 農学部　助教 | 望月 佑哉 | 児童発達支援・放課後デイサービス事業所と連携した、作物栽培プロジェクト<br>～イチゴ栽培を通じて食べ物ができるまでを学ぼう～ |
| 茨城県農林水産部農地局農村計画課<br>JA土浦営農部れんこん課 | 農学部国際フィールド農学センター　教授<br>広域水圏環境科学教育研究センター　教授 | 小松崎 将一<br>桑原 祐史 | 水鳥と共生する新しい霞ケ浦のレンコンづくりに関する研究 |
| 茨城県教育委員会義務教育課 | 教育学部　教授 | 矢島 裕介 | 続・いばらき理科教育支援プロジェクト |

# 戦略的地域連携プロジェクト

## R1

| 事業責任者 | | | プロジェクト名 |
|---|---|---|---|
| 自治体等 | 茨城大学 | | |
| 連携先 | 所属・職名 | 氏名 | |
| 茨城町　生活経済部　農業政策課 | 農学部　教授 | 成澤　才彦 | 露地栽培農産物のチャレンジ実証プロジェクト |
| 茨城県霞ヶ浦環境科学センター | 広域水圏環境科学教育研究センター　助教 | 増永　英治 | 茨城県・茨城大学共同霞ヶ浦水循環・生態系解明プロジェクト |
| 取手市役所　図書館 | 人文社会科学部　教授 | 杉本　妙子 | 民話と方言で取手再発見！プロジェクト |
| 那珂市教育委員会 | 教育学部　准教授 | 丸山　広人 | 新教育支援センター設立に係る地域連携不登校解消事業　「自然や人とのかかわり合いを通して不登校解消を目指すプログラムの構築」 |
| 茨城県産業技術イノベーションセンター | 工学部　教授 | 周　立波 | 型技術ワークショップを利用した県内中小企業と大手製造業のマッチング |
| 水戸市　生活環境部　清掃事務所 | 工学部　教授 | 小林　薫 | 水戸市廃棄物第一最終処分場の廃止措置早期完了プロジェクト |
| キッズルームばんびーに | 農学部　助教 | 望月　佑哉 | 児童発達支援・放課後デイサービス事業所と連携した、作物栽培プロジェクト<br>～イチゴ栽培を通じて食べ物ができるまでを学ぼう～ |
| NPO法人日立理科クラブ | 工学部　教授 | 乾　正知 | ［理数アカデミー］茨城大学特別授業 |
| 株式会社フットボールクラブ水戸ホーリーホック<br>株式会社　茨城ロボッツ・スポーツエンターテインメント | 理学部　教授<br>理学部　准教授 | 中村　麻子<br>百武　慶文 | プロスポーツチームとの連携による地域活性化促進プロジェクト |
| 水戸黄門漫遊マラソン実行委員会事務局 | 人文社会科学部　教授 | 田中　泉 | 水戸黄門漫遊マラソン開催に伴う，地域への経済波及効果の測定 |
| 茨城県近代美術館天心記念五浦分館 | 教育学部　准教授 | 片口　直樹 | 大学と美術館の協働による文化事業の展開<br>ー造形ワークショップ『みんなで描くハニカムタウン』の実践からー |
| つくば市谷田部農業協同組合<br>JAつくば市谷田部 | 農学部　准教授 | 増冨　祐司 | 茨城県つくば市谷田部における気候変動適応支援<br>水稲の白未熟粒発生低減に向けた圃場環境・栽培管理調査 |

## R2 > 地域研究・地域連携プロジェクトに統合

# 地域研究・地域連携プロジェクト

## H30

| 事業責任者 | | | プロジェクト名 |
|---|---|---|---|
| 自治体等 | 茨城大学 | | |
| 連携先 | 所属・職名 | 氏名 | |
| 常陸大宮市市 | 理学部・教授<br>人文社会科学部・教授<br>理学部・教授 | 北　和之<br>岡田　誠<br>西野　由希子<br>長谷川　健 | 自治体施設を利用した、茨城大学学修・地域交流促進プロジェクト |
| | 理学部・教授 | 中村　麻子 | スポーツによる地域活性化 |
| 人文社会科学部との連携協定締結12市町村 | 人文社会科学部・教授 | 佐川　泰弘 | 人文社会科学部市民共創教育研究センター自治体円卓会議が主催する行政評価研究会及びシンポジウム |

## R1

| 事業責任者 | | | プロジェクト名 |
|---|---|---|---|
| 自治体等 | 茨城大学 | | |
| 連携先 | 所属・職名 | 氏名 | |
| 鹿嶋市政策秘書課 | 人文社会科学部・教授 | 馬渡　剛 | 市民共創教育研究センター・提携自治体共催シンポジウムの実施 |
| 株式会社フットボールクラブ水戸ホーリーホック | 人文社会科学部・教授 | 高橋　修 | 連携協定イベント「オール茨城大学招待デー」の強化と実施 |
| 株式会社　鹿島アントラーズFC | 人文社会科学部・教授 | 澁谷　浩一 | 地域に根ざしたプロスポーツの存在意義と今後のあり方について世界史的視野で展望する：<br>鹿島アントラーズの人文社会科学部地域史シンポジウム「スポーツの世界史―茨城からアジア、世界へ―」への参加、社会連携センターとのシンポジウム共同開催 |

# 地域研究・地域連携プロジェクト

R2

| 事業責任者 | | | プロジェクト名 |
|---|---|---|---|
| 自治体等 | 茨城大学 | | |
| 連携先 | 所属・職名 | 氏名 | |
| 茨城県近代美術館天心記念五浦分館 | 教育学部・准教授 | 片口　直樹 | 大学と美術館の協働による文化事業の展開－造形イベント『つながるアート from Museum』の実践から― |
| 茨城県霞ケ浦環境科学センター | 地球・地域環境共創機構・助 | 増永　英治 | 茨城県・茨城大学共同霞ケ浦水水循環・生態系解明プロジェクト |
| 株式会社フットボールクラブ水戸ホーリーホック<br>株式会社茨城ロボッツ・スポーツエンターテイメント | 理工学研究科理学野・准教授 | 百武　豊文 | プロスポーツチームとの連携による地域活性化促進プロジェクト |
| 阿見町<br>阿見町国際交流協会 | 全学教育機構・准教授<br>農学部・准教授 | 瀬尾　匡輝<br>坂上　伸生 | 地域の国際化を考える |
| 茨城町 | 農学部・教授 | 成澤　才彦 | 露地栽培農産物のチャレンジ実証プロジェクト |
| NPO法人　茨城県犬猫共存推進会 | 農学部・教授 | 安江　健 | 茨城大学阿見キャンパスで飼育管理される地域ネコ個体群の行動生態に関する研究 |
| 石岡市　ほか | 人文社会科学部　准教授 | 川島　佑介 | 茨城県自治体×茨城大学市民共創教育研究センター円卓会議 |
| 阿見町 | 農学部・教授 | 小松﨑　将一 | 地元大豆を活用した地域振興プロジェクト |
| 水戸黄門漫遊マラソン実行委員会事務局 | 人文社会科学部　教授 | 田中　泉 | 水戸黄門漫遊マラソン開催に伴う，地域への経済波及効果の算出 |
| NPO法人　日立理科クラブ | 理工学研究科・教授 | 乾　正知 | ［理数アカデミー］茨城大学特別授業 |
| かすみがうら市役所 | 地球・地域環境共創機構水圏フィールドステーション・准教授 | 中里　亮治 | かすみがうら志戸崎地区におけるユスリカ成虫発生量に関する実態調査 |
| NPO法人　あしたを拓く有機農業塾 | 農学部・助教 | 松浦　江里 | ITを活用した県内耕作放棄地活用と環境保全型農業技術のナレッジシェアリング |

# 学生地域参画プロジェクト

## H27

| 所属学部　学年 | 氏　　名 | プ　ロ　ジ　ェ　ク　ト　名 | 連携先 | |
|---|---|---|---|---|
| 人文学部　３年 | 高野　文佳 | 障害のある人への就労支援プロジェクト<br>～地域と障害のある人とのつながりをつくる～ | 全国障害者問題研究会茨城支部（茨障研） | 社会福祉法人木犀会まなーるもちの木 |
| | | | 水戸葵ライオンズクラブ | 株式会社ヴィオーラ |
| | | | 水戸市ダウン症児者親の会・つぼみ | 茨城県ダウン症協会 |
| | | | つくばダウン症児者親の会 | ATTAKA知的障碍者自立支援プロジェクト |
| | | | 有限会社トーア乳業 | 社会福祉法人木犀会まなーるもちの木 |
| 教育学部　１年 | 渋谷　直樹 | 現場から学ぶ茨城学～「食」で開こう地域のトビラ～ | あしたの学校 | ＪＡ水戸 |
| 人文学部　３年 | 細萱　真希 | 大洗応援隊！～カフェから始まる∞の可能性～ | 髭釜商店街 | 大洗町議会 |
| | | | 大洗町役場まちづくり推進課 | 京都大学防災研究所 |
| | | | 大洗町商工会 | |
| 人文科学研究科　２年 | 小野田　明 | 東日本大震災5年目プロジェクト<br>-写真展を通して考えるこれまでと今とこれから- | 夢ふたば人 | 茨城県内への避難者支援・支援者ネットワークふうあいねっと |
| | | | NPO法人勿来まちづくりサポートセンター | 双葉町 |
| | | | 双葉町立学校 | 大洗リゾートアウトレット |
| | | | コープみらい | 加須市立種足小学校 |
| | | | ぷちとまとアートカフェ | |
| 農学部　３年 | 中津　祐也 | のらボーイ＆のらガールの食農教育プロジェクト<br>～No Food 農 Life～ | 阿見町そば打ち同好会 | NPO法人　グラウンドワーク笠間 |
| | | | ひさまつ農園 | |
| 教育学部　３年 | 阿部　巧 | 大子町における、地域活性化プロジェクト | 大子町教育委員会 | 大子町役場 |
| | | | NPO法人　大子障害者支援事務所 | 旧初原小学校周辺地域の方々 |
| 人文学部　３年 | 川本　早紀 | まなびの輪-Work Hard in the Background- | 大洗町役場　まちづくり推進課 | |
| 人文学部　３年 | 伊沢　実由樹 | Think Community project～地域につながるために～ | えぽっく（茨城県地域おこし協力隊） | |
| 人文学部　３年 | 新井　淳也 | ひまわりフェス | 一般社団法人　ならはみらい | |

## H28

| 所属・職名 | 氏　　名 | プ　ロ　ジ　ェ　ク　ト　名 | 連携先 | |
|---|---|---|---|---|
| 人文学部　４年 | 菊地　ほのか | 茨大聞き書き隊　Notes | たすけあいセンター「Juntos」 | |
| 人文学部　３年 | 首藤　沙姫 | 君とチャレンジ　～障害のある人の社会参加支援プロジェクト～ | 社会福祉法人くれよん | 社会福祉法人愛信会 |
| | | | 社会福祉法人 実誠会 | 福祉型専攻科シャンティつくば |
| | | | 社会福祉法人茨城県社会福祉事業団 | ATTAKA知的障碍者自立支援プロジェクト |
| | | | NPO法人茨城の「専攻科」を考える会 | 有限会社ココ・ファーム・ワイナリー |
| 人文学部　３年 | 大枝　俊貴 | 種まきサミット | 石塚サン・トラベル株式会社 | |
| 人文学部　３年 | 野中　萌 | まなびの輪　～大洗との協働～ | 大洗町役場 | 大洗町立大洗小学校 |
| | | | 大洗町立第一中学校 | |
| 人文学部　１年 | 木村　愛実 | 現場から学ぶ茨城学　～畑で広げる地域の「わ」～ | 水戸農業協同組合 | NPO法人雇用人材協会/あしたの学校 |
| | | | 株式会社青春畑きくち農園 | |
| 人文学部　１年 | 佐々木　春菜 | 多-linguaRoom　～地域がつながり、世界へつながる～ | グローカルフェスタいばらき実行委員事務局 | |
| 理学部　３年 | 小沼　里沙 | 大洗応援隊! ～広げよう交流の輪　踏み出そう新たな一歩～ | 髭釜商店街 | 京都大学防災研究所 |
| | | | 大洗町議会 | 大洗町商工会 |
| | | | 大洗町役場まちづくり推進課 | |
| 理学部　２年 | 藤田　真帆 | 日本一つながる学食プロジェクト | 株式会社　坂東太郎 | ほしいもや |
| 農学部　３年 | 佐々木　亮輔 | のらボーイ＆のらガール　食農教育プロジェクト | グランドワーク笠間 | 阿見町そば打ち同好会 |
| | | | ひさまつ農園 | のらっくす農園 |
| | | | アサザ基金 | |
| 農学部　２年<br>農学部　２年 | 小貫えみり<br>中原沙彩 | あみゆめカフェ　～知って、好きになって、発信する　未来に繋げるカフェづくり～ | 阿見町役場 | |

# 学生地域参画プロジェクト

## H29

| 所属・職名 | 氏　　名 | プ　ロ　ジ　ェ　ク　ト　名 | 連携先 | |
|---|---|---|---|---|
| 人文学部　３年 | 正田　真悟 | 地域活性ドローンプロジェクト | いばらきキャンドルナイト | 古民家ゲストハウスjicca |
| | | | 茨城大学人文学部 | 石岡市 |
| 人文学部　３年 | 村上　柚香里 | まなびの輪<br>～大洗における多文化共生～ | 大洗町役場 | 大洗町立大洗小学校 |
| | | | | |
| 人文学部　３年 | 小泉　咲綺 | SDG s ×イバラキ | つくば市役所 | Santi Sena |
| | | | 茨城ロボッツ | 持続可能な開発・みえ |
| 人文学部　３年 | 今野　香織 | 地方創生事業　里山フォレストフェス<br>地域ブランディングプロジェクト | 里山ホテル | 常陸太田市役所 |
| | | | | |
| 人文学部　３年 | 田島　彩花 | 茨大生×東北プロジェクト<br>-茨大生と共にもう一度被災地へ、そして伝える活動へ- | 石塚サン・トラベル株式会社 | |
| | | | | |
| 人文学部　２年 | 木村　愛実 | 現場から学ぶ茨城学<br>～畑で広げる地域の「わ」～ | 地主・小田木 保氏 | 水戸農業協同組合 |
| | | | 常磐大学 | NPO法人雇用人材協会/あしたの学校 |
| | | | 株式会社青春畑きくち農園 | |
| 人文学部　２年<br>人文学部　２年 | 長永　勇太<br>丹治　彩弥乃 | 岡倉天心・五浦発信プロジェクト | (株)五浦観光ホテル　別館　大観荘 | 株式会社　サザコーヒー |
| | | | 北茨城市役所 | 茨城大学五浦美術文化研究所 |
| 人文学部　２年 | 長永　勇太 | 西塩子の回り舞台茨大チーム | 西塩子の回り舞台保存会 | |
| 教育学部　２年 | 梅津　尊子 | 日本一つながる学食プロジェクト | 株式会社坂東太郎 | 茨城県立五浦美術館 |
| 理学部　２年 | 青山　実樹 | 大洗応援隊! ～OPEN OARAI　もっと大洗を身近に～ | 大洗町議会 | 髭釜商店街 |
| | | | 大洗町役場まちづくり推進課 | 京都大学防災研究所 |
| | | | 大洗町商工会 | |
| 工学部　３年 | 川原　涼太郎 | 茨大聞き書き隊Notes | 常総市教育研究会防災教育委員会 | NPO法人GIS総合研究所茨城 |
| | | | 常総市教育委員会学校教育課 | 国土交通省関東地方整備局下館河川事務所 |
| 工学部　３年 | 鎌田　吉紀 | 県北空き家再生プロジェクト<br>～本の集まるゲストハウス～ | | |
| 農学部　３年<br>農学部　３年 | 鈴木　美果<br>中原　沙彩 | あみゆめカフェ<br>～知って、好きになって、発信する　未来に繋げるカフェづくり～ | 阿見町役場 | |
| 農学部　３年 | 小川　真澄 | FES（Food Education Supporter）<br>～食育応援隊～ | 阿見町教育委員会 | JA茨城かすみ |
| | | | 阿見第一小学校 | 阿見第二小学校 |
| | | | 阿見小学校 | 本郷小学校 |
| | | | 舟島小学校 | 君原小学校 |
| | | | 吉原小学校 | 実穀小学校 |
| 農学部　３年 | 寺尾　正樹 | のらボーイ＆のらガール<br>～食農教育プロジェクト～ | のらっくす農園 | ひさまつ農園 |
| | | | 新しい風さとやま | 牛久コミュニティ放送 |
| | | | 茨城県県南生涯学習センター | |
| 理工学研究科　２年 | 渡辺　康太 | SENBA　Project | 児童文化研究会 | 黄門ローイングクラブ |
| | | | 茨城大学漕艇部 | |

## H29(スタートアップ版)

| 所　　属 | 氏　　名 | プ　ロ　ジ　ェ　ク　ト　名 | 連携先 | |
|---|---|---|---|---|
| 人文学部<br>２年 | 川田　綾香 | 廃校那珂湊二校を活用した多世代交流プロジェクト<br>－話題のグランピングに学生が挑戦－ | ひたちなか市役所 | |
| 人文社会科学部<br>１年 | 越中　未穂 | ひたちなか表町商店街活性化プロジェクト | 合同会社オモチャファクトリー | |
| 人文学部<br>３年 | 松崎　薫 | 笠間くりざんまいプロジェクト | NPO法人グランドワーク笠間 | |
| 人文学部<br>２年 | 神田　紗帆 | 「かすみがうら市こども未来フェス」サポート活動 | かすみがうら市教育委員会 | 「かすみがうら子ども未来フェス」実行委員会 |

# 学生地域参画プロジェクト

## H30

| 所属・学年 | 氏　　名 | プ　ロ　ジ　ェ　ク　ト　名 | 連携先 | |
|---|---|---|---|---|
| 理学部 3年 | 青山 実樹 | 大洗応援隊！～巡って遊んで好きになる～ | 大洗町議会 | 髭釜商店街 |
| | | | 大洗町役場まちづくり推進課 | 京都大学防災研究所 |
| | | | 大洗町商工会 | |
| 教育学部 2年 | 阪井 一仁 | 『みとっ歩 - ゼロから始める水戸生活 - vol.2』制作プロジェクト | 水戸市みとの魅力発信課 | |
| 人文社会科学部 4年 | 甲 香菜子 | 国連SDGs×イバラキ | つくば市役所 | Santi Sena |
| | | | 持続可能な開発・みえ | |
| 人文社会科学部 3年 | 鬼澤 麻美 | 茨大生×東北プロジェクト<br>(茨大東北ボランティア*Fleur*) | 石塚サン・トラベル株式会社 | |
| 人文社会科学部 3年 | 小栗 和花 | まなびの輪 | 大洗町役場まちづくり推進課 | 大洗中学校 |
| | | | 大洗小学校 | |
| 人文社会科学部 2年 | 小川 文太 | 減量住宅 in 水戸 | 千住Public Network EAST | 菊地建築工業 |
| | | | アドリエ結 | 水戸市住宅政策課 |
| 人文社会科学部 3年 | 神田 紗帆 | 飛び込め！地域！プロジェクト～かすみがうら市と常陸大宮市編～ | かすみがうら子ども未来フェス」実行委員会 | 西塩子の回り舞台保存会 |
| 人文社会科学部 2年 | 岩田 健太郎 | 岡倉天心・五浦発信プロジェクト | (株)五浦観光ホテル　別館　大観荘 | 株式会社　サザコーヒー |
| | | | 北茨城市役所 | 茨城大学五浦美術文化研究所 |
| 工学部 3年 | 味岡 真央 | 県北にトランポリンを普及しようプロジェクト | 日立市スポーツ振興課 | |
| 農学部 3年 | 加藤 達弘 | のらボーイ＆のらガール ～食農教育プロジェクト～ | 阿見蕎麦打ち同好会 | のらっくす農園 |
| | | | グランドワーク笠間 | 学生団体いろり |
| 農学部 3年 | 黒澤 まりな | FES ～食育応援隊～ | 茨城かすみ農業協同組合 | |
| 工学部 4年 | 鎌田 吉紀 | 県北空き家再生プロジェクト | 日立市都市政策課 | |

R1

| 所属・学年 | 氏　　名 | プ　ロ　ジ　ェ　ク　ト　名 | 連携先 | |
|---|---|---|---|---|
| 工学部　3年 | 齋藤　広明 | IoTを用いた茨城県観光業活性プロジェクト「Brige」 | 行方市　政策推進室 | |
| 農学部　3年 | 武田　迅 | のらボーイ＆のらガール　食農教育プロジェクト | 阿見町男女共同参画センター | グランドワーク笠間 |
| | | | のらっくす農園 | |
| 農学部 | 伊藤　友紀 | FES(FoodEducationSupporter)～食育応援隊～ | 茨城かすみ農業協同組合 | |
| 人文社会科学部3年 | 小川　文太 | 減量住宅in水戸 | 千住 Public Network EAST | 株式会社一円 |
| | | | アドリエ結 | 水戸市市民協働部防災・危機管理課 |
| 教育学部　3年 | 黒畑　晴喜 | さまーすくーるin大子2019 | 大子町役場まちづくり課 | |
| 人文社会科学部2年 | 河井　孝太 | 地域の伝統文化継承に学生が取り組む「西塩子の回り舞台」プロジェクト | 西塩子の回り舞台保存会 | 常陸大宮市まちづくりネットワーク |
| 教育学部3年 | 阪井　一仁 | 『みとっ歩－ゼロから始める水戸生活－vol.3』制作プロジェクト | 水戸市市長公室みとの魅力発信課 | |
| 理学部　4年 | 鈴木　大河 | 茨城大学地質情報活用プロジェクト | 茨城大学ジオパーク推進室 | つくば市経済部観光推進課 |
| | | | 株式会社東京地図研究社 | |
| 人文社会科学部3年 | 須郷　まどか | まなびの輪 | 大洗町役場まちづくり推進課 | 大洗町大洗第一中学校 |
| | | | 大洗町立大洗小学校 | |
| 人文社会科学部 | 佐山　寧々 | 五浦遊学ルートマップ作成プロジェクト | 茨城県立天心記念五浦美術館 | |
| 工学部　2年 | 夛田　雄介 | 水戸堀町・ひたちなか市における地域資源の活用 | みなとeaieaiクラブ | 医療保人　博仁会 |
| | | | 株式会社　オセヤ一級建築士事務所 | |

# 学生地域参画プロジェクト

R1（スタートアップ版）

| 所属・学年 | 氏　　名 | プ　ロ　ジ　ェ　ク　ト　名 | 連携先 | |
|---|---|---|---|---|
| 人文社会科学部３年 | 萩原　健太 | 福祉や健康をテーマにした多世代参加型のまちづくり | 医療法人博仁会　フロイデ水戸メディカルプラザ | 社会福祉法人くれよん工房 |
| 工学部４年 | 清水　喬宏 | 大学生による"ものづくり教室"の企画と実践 | 茨城県立北茨城特別支援学校 | 茨城県立常陸太田特別支援学校PTA |
| 人文社会科学部３年 | 中橋　彩乃 | 茨大生×地域防災プロジェクト（茨大東北ボランティア＊Fleur＊） | | |
| 工学部４年 | 加納　歩 | バスに乗って日立の街を活性化！ | | |
| 人文社会科学部２年 | 森田　耕平 | 大洗応援隊！Presents　ほげFes～音楽で広がる商店街～ | 髭釜商店街 | 大洗町役場まちづくり推進課 |
| | | | 大洗町商工会 | 京都大学防災研究所 |
| | | | 大洗町商店街 | |

R2

| 所属・学年 | 氏　　名 | プ　ロ　ジ　ェ　ク　ト　名 | 連携先 | |
|---|---|---|---|---|
| 農学部３年 | 堀池　志保 | FES(FoodEducationSupporter)～食育応援隊～ | 水郷筑波農業協同組合 | |
| 理学部４年 | 佐藤　未笛 | 地質情報活用プロジェクト | 茨城県北ジオパーク推進協議会 | 株式会社東京地図研究社 |
| 農学研究科１年 | 福田　真丈 | 茨大農場産の有機農作物で地域の人々を元気に！ | ami-seed | |
| 人文社会科学部３年 | 根岸　彩香 | 茨城県内大学の部活コンサルティング | 株式会社art001 | |
| 理学部　４年 | 吉田　春菜 | 茨城で農業ボランティア | 水戸南ロータリークラブ | 水戸市農業後継者クラブ |

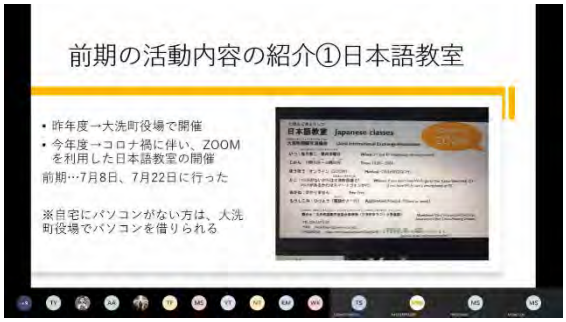
新入生と学プロ団体等地域連携活動団体とのオンライン懇談会開催について

社会連携課

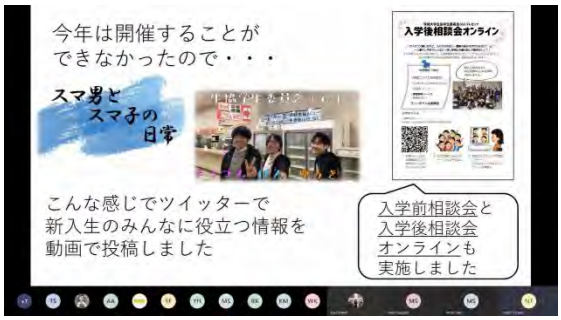
7 月 29 日（水）に「新入生と学プロ団体等地域連携活動団体とのオンライン懇談会」が開催された。本懇談会は、学生らからの「新入生と交流を図りたい」とのニーズを踏まえて、現在、新型コロナウイルスの影響により公募を延期している学生地域参画プロジェクト（通称：学プロ）の前段企画として立案された。内容としては、オンライン会議システム「Teams」を用いて開催され、令和元年度学生地域参画プロジェクト団体、県内プロスポーツチームや地域社会と連携して活動を行っている団体の活動紹介（全 10 団体）が行われた。

本懇談会は、第一部（13 時 00 分～14 時 40 分）と第二部（14 時 50 分～16 時 30 分）と二部構成で開催され、新入生・在学生・教職員の全 38 名が参加した。参加団体の中には、学生のみならず教職員と学生が協力して活動を行っている団体もあり、ユニフォームを着用したり、活動風景や作成物の写真を実際に見せるなど、それぞれユーモアと個性のあふれる活動紹介となった。また、自身の活動のきっかけやコロナ禍での活動状況について質問があがるなど、団体の活動紹介のみならず、発表者から新入生からメッセージが伝えられる場面もあり、活気ある有意義な懇談会となり、参加者アンケートでも「参加して良かった」との声が多く寄せられた。

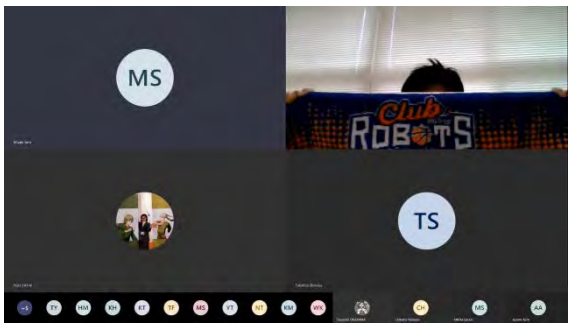
＜参加団体＞
〇学プロ団体
・まなびの輪　・こどもふれあい隊　・鋳造クラブ　・FES（Food Education S）
・地質情報活用プロジェクト　・福祉と健康をテーマとした多世代参加型まちづくり
〇プロスポーツチームとの連携団体
・iBIRD　・茨城大学水戸ホーリーホック応援ネットワーク
〇地域社会との連携団体
・茨城大学ローターアクトクラブ　・GI（生協学生委員会）




活動紹介の様子（まなびの輪）




活動紹介の様子（GI）




活動紹介の様子（茨城ロボッツ）

【資料６】

公開期間
令和3年
1月22日(金)
～2月12日(金)

受講対象
高校生～

# 受講生募集！

## 令和2年度 茨城エコ・カレッジ
## （体験コース）

環境問題についての興味を持ち，環境保全活動を進んで実践するリーダーを養成するため，
茨城エコ・カレッジを開講します。
地球・地域，そして生活空間規模の問題やこれらに対する適応策等について，
大学教員による講義を通じて楽しく学びましょう。

**開催方法** **オンデマンド配信**（ご自宅等で受講いただけます。）

■**定　　員**：100名（先着順） **受講費無料**

■**受講資格**：茨城県内に在住、
又は通勤・通学している高校生以上の方

■**申　　込**：茨城大学リカレント教育プログラム・公開講座
ホームページ内、専用フォーム（専門コース）
よりお申込みください。
（http://koukai.scc.ibaraki.ac.jp/）

■**応募締切**：令和3年1月15日（金）

■**主　　催**：茨城県・茨城大学

■**問合せ先**：茨城大学社会連携センター
（029-228-8413）

**～注意事項～**

※すべての講義がオンライン配信となります。動画を視聴可能なパソコン等が必要となりますので，ご注意ください。

※申し込み後，動画視聴ページにアクセスするためのパスワードをお送りいたします。パスワードがないと講義が受講できませんので，茨城大学社会連携センターからのメールは受信できるよう設定をお願いします。

※パソコン等で一部対応していない機種・OS等がございます。機器の問題等で受講できなかった場合は，本センターでは一切責任を負うことができませんので，ご了承ください。

# 令和2年度茨城エコ・カレッジ（体験コース）カリキュラム

受講条件：事前申込のあった方のみ受講可能となります。（オンラインでの配信となるため，インターネット環境が必要です。）
申込方法については，リカレント教育プログラム専門コースホームページ（http://koukai.scc.ibaraki.ac.jp/professional_courses）をご確認ください。
申し込み期日までに必ず申し込みを行ってください。（締切後のお申込みはお受けできません。）

修了要件：以下の①かつ②の要件を満たした受講者には、茨城県知事及び茨城大学長連名の令和2年度茨城エコ・カレッジ（体験コース）修了証を交付します。
令和2年度茨城エコ・カレッジ（体験コース）を修了した受講者は、「茨城県地球温暖化防止活動推進員」に申し込むことができる資格が得られます。
「茨城県地球温暖化防止活動推進員」の詳細については、茨城県ホームページ（http://www.pref.ibaraki.jp/seikatsukankyo/kansei/chikyu/ondanka-suishin.html）をご覧ください。
①講義№2～7のすべての講義を受講する必要があります。
②各講義受講後にレポート等を提出する必要があります。

## 【講義】動画公開期間 令和3年1月22日（金）～2月12日（金）

| No. | 動画時間 | 講義名 | 講師（茨城大学教員） | SDGs分野（近い分野順） |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 約20分 | 令和2年度茨城エコ・カレッジの紹介と学び方（総論） | 藤田　昌史 | 6. 水・衛生，11. 都市，15. 陸上資源，5. ジェンダー |
| 2 | 約60分 | 環境NPO・NGOの可能性<br>～市民が守り、市民が創る環境～ | 原口　弥生 | 17. 実施手段，6. 水・衛生，13. 気候変動 |
| 3 | 約60分 | 霞ヶ浦に生息する生物群集の長期変化とそれらの理由について | 中里　亮治 | 15. 陸上資源 |
| 4 | 約60分 | 地球における水と元素の循環 | 伊藤　孝 | 6. 水・衛生，13. 気候変動，14. 海洋資源，15. 陸上資源 |
| 5 | 約60分 | 気候変動と災害<br>～環境と防災・減災技術の両立を目指して～ | 小林　薫 | 13. 気候変動，15. 陸上資源，11. 都市 |
| 6 | 約60分 | 農耕地土壌における施肥由来窒素の動態と施肥量の削減 | 淺木　直美 | 13. 気候変動，2. 飢餓 |
| 7 | 約60分 | 21世紀の地球環境を考える | 三村　信男 | 13. 気候変動，11. 都市，9. イノベーション，4. 教育 |

※SDGsの分野について（以下の17分野があります。）
SDGsとは・・・
SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）は、「誰一人取り残さない（leave no one behind）」持続可能でよりよい社会の実現を目指す世界共通の目標です。2015年の国連サミットにおいて全ての加盟国が合意した「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の中で掲げられました。2030年を達成年限とし、17のゴールと169のターゲットから構成されています。
（※外務省パンフレット「持続可能な開発目標（SDGs）と日本の取組」より抜粋）

令和３年３月 12 日
茨城大学社会連携センター

# 令和２年度エコ・カレッジ開催事業　報告書

受託事業「令和２年度エコ・カレッジ開催事業」について，「令和２年度茨城エコ・カレッジ（体験コース）」と講座名を設定し，次のとおり企画実施した。

## １　概要

・日程：令和３年１月 22 日（金）～令和３年２月 19 日（金）
（当初は２月 12 日（金）までの予定だったが，№7 講義動画データ破損により再収録となり，公開開始が遅れたため，公開期間を延長した。）
・実施方法：オンデマンド動画配信
・講義数：７回（推奨講義を含む）
・定員：100 名
・募集期間：令和２年 12 月７日（月）～令和３年１月 18 日（月）
（当初は１月 15 日（金）までの予定だったが，申込の問い合わせが多いことから，募集期間を延長した。）

## ２　受講者数等について（内訳）

（１） 受講者 100 名（男性：44 名,女性：56 名）

| 年代 | 10 代 | 20 代 | 30 代 | 40 代 | 50 代 | 60 代～ |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 人数 | 53 名 | 19 名 | 6 名 | 11 名 | 2 名 | 9 名 |

| 職業 | 会社員 | 公務員 | 団体職員 | 自営業 | 無職 | 大学生等 | 高校生 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人数 | 11 名 | 4 名 | 3 名 | 1 名 | 8 名 | 30 名 | 40 名 | 3 名 |

（２） 修了者 69 名（男性：31 名,女性：38 名）

| 年代 | 10 代 | 20 代 | 30 代 | 40 代 | 50 代 | 60 代～ |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 人数 | 41 名 | 10 名 | 4 名 | 9 名 | 1 名 | 4 名 |

| 職業 | 会社員 | 公務員 | 団体職員 | 自営業 | 無職 | 大学生等 | 高校生 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 人数 | 7 名 | 3 名 | 3 名 | 1 名 | 2 名 | 17 名 | 33 名 | 3 名 |

３　各講義結果

講義内容の詳細については，別添 DVD 内の講義動画をご確認ください。

| No. | 講義名 | 動画時間 |
|---|---|---|
| 1 | 令和 2 年度茨城エコ・カレッジの紹介と学び方（総論） | 約 34 分 |

| 公開開始 | 公開終了 | SDGS 分野 |
|---|---|---|
| 1 月 22 日（金） | 2 月 19 日（金） | 6.水・衛生，11.都市，15.陸上資源，5.ジェンダー |

| 視聴回数 | レポート提出者数※ |
|---|---|
| 108 回 | ― |

| 講師（所属・教員名） | |
|---|---|
| 理工学研究科　准教授 | 藤田　昌史 |

講義内容

茨城大学の各学部･研究機構で環境分野の第一線で研究に取り組んでいる 6 名の教員のオンデマンド配信講義に先立ち，まず現在の環境問題の特徴を整理します。

そして，環境問題の解決に向けてはさまざまな学問分野が関係することや分野横断的な視点を持つことの重要性について解説し，令和 2 年度茨城エコ・カレッジの学び方のヒントを紹介します。

| No. | 講義名 | 動画時間 |
|---|---|---|
| 2 | 環境 NPO・NGO の可能性　～市民が守り，市民が創る環境～ | 約 60 分 |

| 公開開始 | 公開終了 | SDGS 分野 |
|---|---|---|
| 1 月 22 日（金） | 2 月 19 日（金） | 17.実施手段，6.水・衛生，13.気候変動 |

| 視聴回数 | レポート提出者数 |
|---|---|
| 151 回 | 71 名 |

| 講師（所属・教員名） | |
|---|---|
| 人文社会科学部　教授 | 原口　弥生 |

講義内容

地球規模から生活空間まで，さまざまな環境危機を前に，これまで多くの住民・市民・環境 NPO 等が活動をしてきました。

これまでの環境運動を振り返ってみると，市民が守った環境もあれば，市民が創りあげた環境もあります。

環境問題に果たしてきた市民活動の意義や役割も，時代を経て変化しています。

現代の環境問題において，環境 NPO や生活者としての個人が環境問題の解決に果たしうる可能性と課題を一緒に考えましょう。

| No. | 講義名 | 動画時間 |
|---|---|---|
| 3 | 霞ヶ浦に生息する生物群集の長期変化とそれらの理由について | 約 65 分 |

| 公開開始 | 公開終了 | SDGS 分野 |
|---|---|---|
| 1 月 22 日（金） | 2 月 19 日（金） | 15.陸上資源 |

| 視聴回数 | レポート提出者数 |
|---|---|
| 141 回 | 71 名 |

| 講師（所属・教員名） | |
|---|---|
| 地球・地域環境共創機構　准教授 | 中里　亮治 |

講義内容

日本第 2 位の面積を誇る霞ヶ浦は，様々な湖沼環境問題を経験してきた湖ですが，いまだに国内有数の漁獲量を維持し，高い生物多様性を有する湖です。

本講義では，霞ヶ浦に生息する生物群集の長期変化について概説し，さらに，そのような変化がどのような理由によって起きているのかを解説します。

また，霞ヶ浦における今日的環境問題についても紹介します。

| No. | 講義名 | 動画時間 |
|---|---|---|
| 4 | 地球における水と元素の循環 | 約 55 分 |

| 公開開始 | 公開終了 | SDGS 分野 |
|---|---|---|
| 1 月 22 日（金） | 2 月 19 日（金） | 6.水・衛生，13.気候変動，14.海洋資源，15.陸上資源 |

| 視聴回数 | レポート提出者数 |
|---|---|
| 109 回 | 69 名 |

| 講師（所属・教員名） | |
|---|---|
| 教育学部　教授 | 伊藤　孝 |

講義内容

地球の表面には水が存在し，それがかたちを変え，地球の表面をぐるぐる循環しています。

また，水は様々な物質を溶かす働きが強く，溶かした物質を運ぶ役目を担っています。

今回の授業では，全地球的な水の循環，およびそれに伴う物質の循環を踏まえ，我々の環境・生活にどのような影響を及ぼしているか見ていこうと思います。

| No. | 講義名 | 動画時間 |
|---|---|---|
| 5 | 気候変動と災害　～環境と防災・減災技術の両立を目指して～ | 約 55 分 |

| 公開開始 | 公開終了 | SDGS 分野 |
|---|---|---|
| 1 月 22 日（金） | 2 月 19 日（金） | 13.気候変動，15.陸上資源，11.都市 |

| 視聴回数 | レポート提出者数 |
|---|---|
| 107 回 | 69 名 |

| 講師（所属・教員名） | |
|---|---|
| 工学部都市システム工学科　教授 | 小林　薫 |

講義内容

平成 27 年関東・東北豪雨の鬼怒川堤防や令和元年度台風 19 号襲来時の那珂川・久慈川水の堤防決壊など，短時間豪雨に伴う堤防決壊が増加傾向にあります。

今後も異常気象と水災害の頻発化・激甚化が予想される中，安全性と経済性を両立した「粘り強い環境型堤防」が強く求められています。

本講義では，SDGs の目標達成に貢献すると共に，循環型社会構築にも寄与する水産系副産物を活用した防災・減災対策について紹介します。

| No. | 講義名 | 動画時間 |
|---|---|---|
| 6 | 農耕地土壌における施肥由来窒素の動態と施肥量の削減 | 約 46 分 |

| 公開開始 | 公開終了 | SDGS 分野 |
|---|---|---|
| 1 月 22 日（金） | 2 月 19 日（金） | 13.気候変動，2.飢餓 |

| 視聴回数 | レポート提出者数 |
|---|---|
| 103 回 | 69 名 |

| 講師（所属・教員名） | |
|---|---|
| 農学部　准教授 | 浅木　直美 |

講義内容

分子窒素（N2）からアンモニアを合成するハーバー・ボッシュ法が 20 世紀初期に確立されたことで窒素化学肥料の生産が可能となった。

窒素化学肥料の施肥量の増加に伴い作物生産力は飛躍的に向上した。

しかし，作物に吸収されなかった窒素は環境に負荷を与える場合があり，その施肥量の削減が求められている。

本講義では，農耕地土壌における化学肥料由来窒素の動態とその削減方法について説明します。

| No. | 講義名 | 動画時間 |
|---|---|---|
| 7 | 21 世紀の地球環境を考える | 約 59 分 |

| 公開開始※ | 公開終了 | SDGS 分野 |
|---|---|---|
| 2 月 1 日（月） | 2 月 19 日（金） | 13.気候変動，11.都市，9.イノベーション，4.教育 |

| 視聴回数 | レポート提出者数 |
|---|---|
| 125 回 | 69 名 |

| 講師（所属・教員名） | |
|---|---|
| 地球・地域環境共創機構　特命教授 | 三村　信男 |

講義内容

気候変動やコロナウイルスの影響によって世界ではどんなことが起きているのでしょうか？
世界各地で広がるさまざまな影響を見るとともに，パリ協定や脱炭素技術，ライフスタイルの転換など温暖化対策について紹介します。
国連が進める SDGs の達成の上に，脱炭素社会や災害やパンデミックに強靭な社会をめざしていますが，これらがどのように地球環境の未来につながるのかを考えます。

## ４　アンケート内容（抜粋）

**今回の講義内容に関心を持てましたか？**

| | 関心を持てた | やや関心を持てた | あまり関心を持てなかった | 関心を持てなかった |
|---|---|---|---|---|
| No.1 | 70.3% | 29.7% | 0% | 0% |
| No.2 | 66.3% | 33.7% | 0% | 0% |
| No.3 | 63.3% | 34.2% | 2.5% | 0% |
| No.4 | 79.7% | 18.9% | 1.4% | 0% |
| No.5 | 65.4% | 32.1% | 2.5% | 0% |
| No.6 | 67.1% | 31.6% | 1.3% | 0% |
| No.7 | 84.1% | 14.6% | 0% | 1.2% |

**今回の講義内容は理解できましたか？**

| | 理解できた | やや理解できた | あまり理解できなかった | 理解できなかった |
|---|---|---|---|---|
| No.1 | 78.4% | 18.9% | 2.7% | 0% |
| No.2 | 60.2% | 38.6% | 1.2% | 0% |
| No.3 | 55.7% | 41.8% | 2.5% | 0% |
| No.4 | 63.5% | 33.8% | 2.7% | 0% |
| No.5 | 46.9% | 50.6% | 2.5% | 0% |
| No.6 | 51.9% | 45.6% | 2.5% | 0% |
| No.7 | 75.6% | 24.4% | 0% | 0% |

**今回の講義について感想などを自由に記入してください。（自由記述，原文のまま）**

・私が知らない環境問題が多く取り上げられていて，こんなにも多くの環境問題を抱えていることが分かった。

・市民活動の意義・役割に関する経緯・類型・事例が非常に分かり易くまとめられており，短時間ながらも中身の濃い内容だった。

・環境問題に取り組んでいくことの重要さを改めて知りました。

・私はこの講義を受講して，周りにボランティアや環境保全の取り組みを積極的にしている人はいませんが，すこし変わり者だと思われても，そういった変わり者が少しずつ世界を変えていく，そう思い，少しずつ環境保全の取り組みをしていこうと思いました。

・環境活動をしていますが，NPO，NGO について はあまり詳しくありませんでした。 どの様な届出などでそう言った活動ができるのか？実際に活動するにはどうしたら良いのかが，もう少し詳しく知れると，実行する人の後押しになると感じました。

・今回の講義は水に関するもので，海が塩水の理由や岩石によって二酸化炭素が炭酸水素イオンに化学変化し二酸化炭素の温室効果が関係なくなっていることを知って驚きました。

・人間が便利で豊かな暮らしを求めてきた故に今，起こっている様々な問題に私達一人一人が目を向け，理解することが大切だと感じました。 私自身，学生時代に那珂川の水害や2019 年の水害で友人の多くが被災した事を今でも鮮明に覚えております。今回講義で教授いただいた新しい耐越水堤防が多くの場所に普及し，近年増えている水災害を少しでも防げるよう願っています。

・教授の行っている研究の一部を見ることができて面白かった。

・組織の分野の分け方，環境に関する歴史について知り，環境の大切さや保護の仕方が分かりました。

・気候変動の現状や影響，対策に向けた動き，そして今後の岐路・方向性について分かり易い構成・内容でまとめて頂き，非常に分かり易い構成でした

・今日のパンデミックの影響で，環境問題への取り組みは下降気味になってしまっていると感じる。小さなことでも日常的な取り組みが大きな変化につながっていくと思う。

## ５　まとめ

### （１）講義

・講義内容についての関心・理解度アンケートからもわかるように，受講者全体を通して，「関心を持てた・やや関心を持てた」，「理解できた・やや理解できた」との声が多く，講義については，受講者のニーズにあった講義であるとともに，受講者が理解しやすく配慮した内容を今回提供することができた。

・感想アンケートの中でも記述があるように，「環境問題に取り組んでいくことの重要さを改めて知りました。」や「パンデミックの影響で，環境問題への取り組みは下降気味になってしまっていると感じる。小さなことでも日常的な取り組みが大きな変化につながっていくと思う。」など環境問題への理解・関心を，本事業を通して高めることができた。

・新型コロナウイルス感染症（COVID-19）感染拡大防止のため，初の取組としてオンデマンド配信形式の講義を行ったが，レポート提出者数に比べ視聴回数が多くなっており，受講者が繰り返し講義を視聴でき，講義に対する理解を深める一因となったと考えられる。

・修了者が前年度の 59 名から 69 名と増加しており，フィールドワークを修了要件にしなかったことと，オンデマンド配信のため受講者が自身の予定に合わせて講義を視聴できたことが要因と考えられる。

・大学生等・高校生からの申込が全体の約 7 割となっており，環境に興味がある学生がさらに知識を深める場として一定のニーズがあることがわかった。また，学生が受講しやすい夏季に開講した前年度よりも受講者が増えており（大学生・高校生：前年度 43 名，本年度 70 名），オンデマンド配信という受講しやすい方法で開講できたことが一因と考えられる。また，次年度も夏季開講にこだわることなく，柔軟に時期を検討できると考えられる。

### （２）運営

・COVID-19 の影響もあり，オンデマンド配信形式での講座開講を行ったが，感染者数が増加し，外出自粛要請や県独自の緊急事態宣言が発出される中でも，支障なく事業実施することができた。このことから，オンデマンド配信形式は，対面での事業開講が中止となる可能性がある状況下でも事業を継続できる有効な方法だといえる。

・オンライン上で申し込みから受講・レポート提出まで完結するため，対面でやりとりする必要がなく，講座運営の当日対応がないため，少人数で事業を運営していくことが可能であり，少人数で運営可能であるとともに，不測の事態への対応が容易であった。

・一方で，動画配信のため，事前に講義の撮影・編集など，講師・運営の負担が増加する面もあり，改善の余地がないかさらに検討する必要がある。

【資料７】

# 茨城大学リカレント教育プログラム

# 2020年度多文化理解パートナー育成講座
## ～茨城の多文化共生を考える～

**2019年4月の出入国管理及び難民認定法の改正を受け、**
**今後ますます在留外国人数が増加することが予想されています。**
**そのなかで、私たちはどのように地域に住む外国人と関わっていけばよいのでしょうか。**
**本講座では、県内の在留外国人を支援する団体の活動を映像で紹介し、**
**私たち地域住民ができる在留外国人に対する支援について考えます。**

## 公開期間

**２０２１年2月５日（金）～２月２６日（金）**

**※オンデマンド配信**（ご自宅や職場で受講いただけます。）

■定　員：１００名（先着）
■申　込：茨城大学リカレント教育プログラム・公開講座ホームページ内
専用フォーム(専門コース・多文化理解パートナー)よりお申し込みください。
（http://koukai.scc.ibaraki.ac.jp/）
■受講料：無料
■応募締切：２０２１年1月２９日（金）
■問合せ先：茨城大学社会連携センター
(０２９－２２８－８４１３)

申込フォーム
QRコード

**主催：茨城大学／後援：茨城県**

# 多文化理解パートナー育成講座 概要

## 講　座　私たちにできる在留外国人に対する支援を考える

### インタビュアー

**瀬尾　匡輝**
SEO　MASAKI

茨城大学全学教育機構 国際教育部門 准教授
専門：言語教育学、教育社会学

**【動画公開期間】 ２０２１年２月５日（金）～２月２６日（金）**

### インタビュー先（5団体）

#### ① 茨城県県民生活環境部 女性活躍・県民協働課

本県に在住する外国人が地域の一員として共生できる多文化共生社会の実現を目指しています。

#### ② ひたちなか市国際交流協会

国籍、言語、慣習の異なる人々が対等な立場で共に生きる地域社会作りを目指し、日本語支援をはじめとした様々な活動を行っています。

#### ③ 茨城大学 まなびの輪

大洗町での日本語教室の開催や、外国ルーツの子どもたちの支援、交流イベントの開催などを行っています。

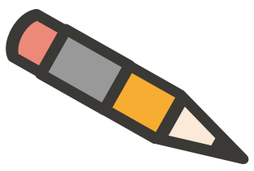
#### ④ 茨城県内の中学校

在留外国人の増加に伴い、日本語の指導が必要な外国人児童生徒も増えてきています。県内のとある中学校の日本語授業の様子を取材させていただきました。

#### ⑤ 多文化共生グループ おみたまじん

国籍・言語・文化の違いを理解し、ともに協力しあえる地域をつくることを目指して2013年から活動しているグループです。

**受講条件： 事前登録のあった方のみ受講可能となります。**



- 登録方法についてはリカレント教育プログラム専門コースホームページをご確認ください。（http://koukai.scc.ibaraki.ac.jp/professional_courses）
- 申し込み期日までに必ず申し込みを行ってください。締切後のお申し込みはお受けできません。
- オンラインでの配信となるため、インターネット接続環境が必要となります。

**注意事項： お申し込み後、動画視聴用のパスワードをお送りいたします。**

- パスワードがないと受講できませんので茨城大学社会連携センターからのメールは受信できるよう設定をお願いいたします。
- パソコン等で一部対応していない機種・OS等がございます。
機器の問題等で受講できなかった場合は、本センターでは一切責任を負うことができませんので、予めご了承ください。

令 和 3 年 3 月 11 日
茨城大学社会連携センター

# ２０２０年度多文化理解パートナー育成講座
# ～茨城の多文化共生を考える～　報告書

＜目的＞

2019 年 4 月の出入国管理及び難民認定法の改正を受け、今後ますます在留外国人数が増加することが予想されることから、地域住民ができる在留外国人支援や多文化共生について考え、理解を深めることを目的として実施いたしました。

【到達目標】

本講座では，茨城県内で在留外国人を支援する団体の活動を映像で紹介し，私たち地域住民ができる在留外国人に対する支援について考えていくことで、コミュニティ内における相互支援の重要性の再認識を図りました。また、外国人を受け入れる側の人々が当事者としてかれらとどのようにかかわり、支援していくのか考えることを目標としました。

＜受講対象＞

一般市民

＜実施方法＞

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の状況に関わらず開催できるよう、オンデマンド配信で実施しました。

【講義内容】

瀬尾准教授が 5 団体にインタビューした内容を 1 本の動画にまとめ、編集したものを配信した。

| 動画時間 | 講義名 | インタビュー先 |
|---|---|---|
| 90 分<br>（各 15 分） | 私たちにできる在留外国人に対する支援を考える<br>（インタビュアー：<br>全学教育機構　瀬尾匡輝准教授） | 茨城県女性活躍・県民協働課 |
| | | ひたちなか市国際交流協会 |
| | | 多文化共生グループおみたまじん |
| | | 茨城大学まなびの輪 |
| | | ひたちなか市立那珂湊中学校(※) |

※インタビュー先の希望により、動画内では「茨城県内の中学校」と匿名で紹介

＜概要＞

| | |
|---|---|
| 目　　標 | 私たち地域住民ができる在留外国人に対する支援について考えていくことで、コミュニティ内における相互支援の重要性の再認識を図る。 |
| 定　　員 | 100 人 |
| 方　　式 | オンデマンド配信 |
| 受 講 料 | 無料 |

＜周知方法＞

・茨城大学ホームページ、Facebook、Twitter へ掲載
・茨城大学教務情報ポータル掲示板へ掲載
・いばらき地域づくり大学・高専コンソーシアム会員校へメール
・県内県立高校へメール（県庁主管課経由）
・茨城県内生涯学習センター、図書館へチラシを送付
・茨城県農業協同組合中央会へチラシを送付

※「日頃からボランティア等で在留外国人支援を行っている方」、「技能実習生を雇用している企業や団体」「多文化共生サポーターバンクに興味を持っている方」などをターゲットとしたチラシを作成して周知した。

**＜プログラム＞**

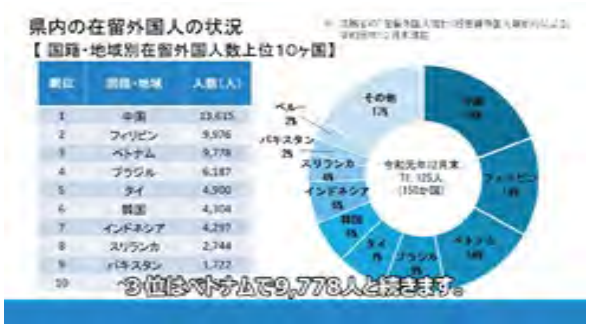
令和３年２月５日（金）～令和３年２月 26 日（金）

茨城大学リカレント教育プログラム・公開講座ホームページ内で公開

| | | |
|---|---|---|
| はじめに | 瀬尾　匡輝 准教授 | ・本講座の概要について |
| 動画① | 茨城県県民生活環境部<br>女性活躍・県民協働課 | ・茨城県内の在留外国人の現状や支援について |
| 動画② | ひたちなか市国際交流協会 | ・日本語支援プロジェクトを始めたきっかけ、具体的な活動内容について<br>・日本語教室へ通う在留外国人へのインタビュー　等 |
| 動画③ | 多文化共生グループ<br>おみたまじん | ・おみたまじんを始めたきっかけ、おみたまじんの日本語教室について |
| 動画④ | 茨城大学　まなびの輪 | ・まなびの輪の活動や、日本語教室のオンライン化について |
| 動画⑤ | 茨城県内の中学校 | ・中学校での日本語教室の様子、生徒やボランティアへのインタビュー　等 |
| まとめ | 瀬尾　匡輝 准教授 | ・本講座に対する感想、考察について |
| 宣伝 | 瀬尾　匡輝 准教授 | ・令和３年度多文化理解パートナー育成講座の周知・宣伝 |

在留外国人へのインタビュー

（提供元：ひたちなか市国際交流協会）




県内の在留外国人の状況

（提供元：茨城県県民生活環境部女性活躍・県民協働課）

中学校での日本語授業の様子

（提供元：茨城県内の中学校）

代表メッセージ

（提供元：多文化共生グループおみたまじん）

＜受講者数等＞

| 【申込】 | 【人数】 |
|---|---|
| 会社員 | 19 人 |
| 公務員 | 14 人 |
| 団体職員 | 8 人 |
| 自営業 | 6 人 |
| 無職 | 16 人 |
| 大学生・短期大学生・専門学校生等 | 46 人 |
| 高校生 | 7 人 |
| その他 | 39 人 |
| 合計 | 155 人 |

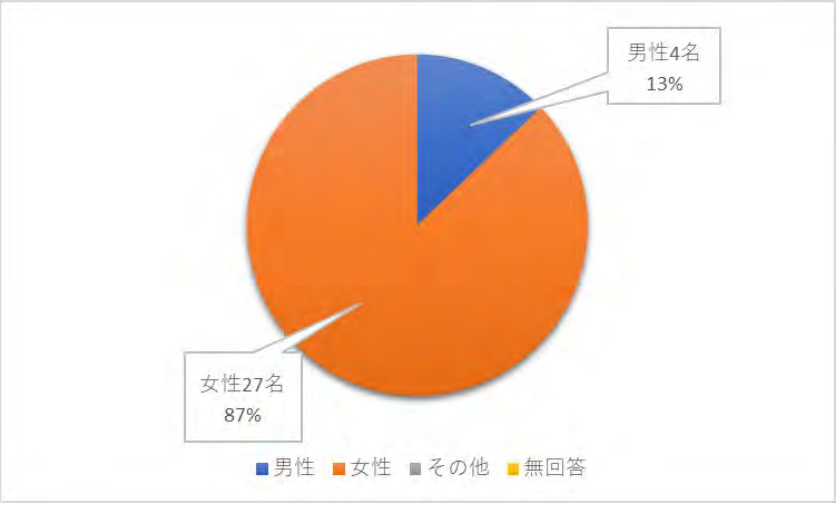
＜オンデマンド配信＞

配信期間：令和 3 年 2 月 5 日（金）～令和 3 年 2 月 26 日（金）

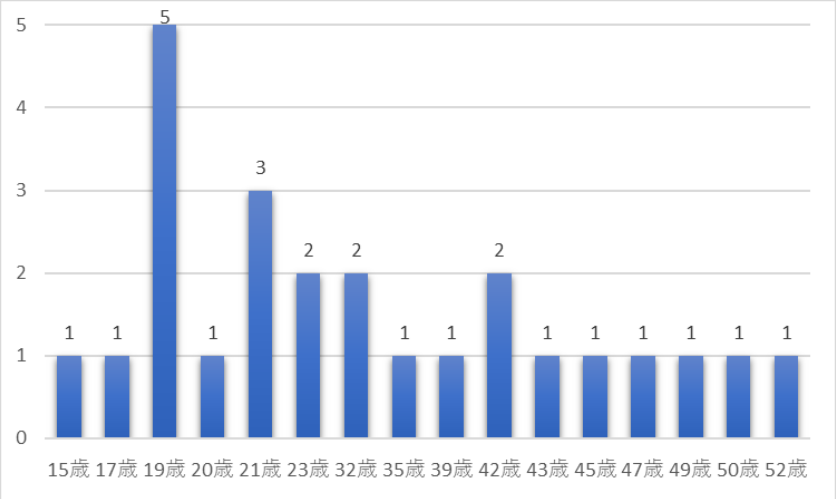
| 【動画】 | | 【視聴回数】 |
|---|---|---|
| フルバージョン | | 86 回 |
| 分割バージョン | 茨城県県民生活環境部女性活躍・県民協働課 | 104 回（前半：58 後半：46） |
| | ひたちなか市国際交流協会 | 72 回 |
| | 多文化共生グループ　おみたまじん | 55 回 |
| | 茨城大学　まなびの輪 | 57 回 |
| | 茨城県内の中学校 | 56 回 |
| 合計 | | 430 回 |

＜アンケート結果（回答者 31 名）＞

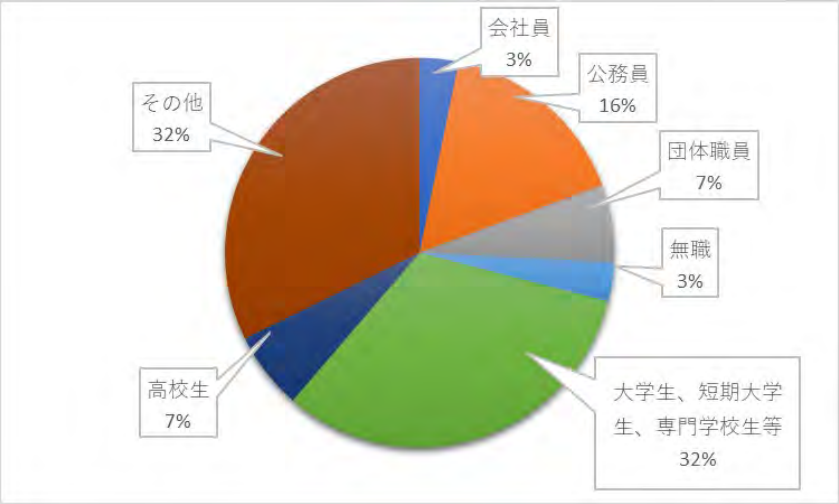
Q1.性別を教えてください。



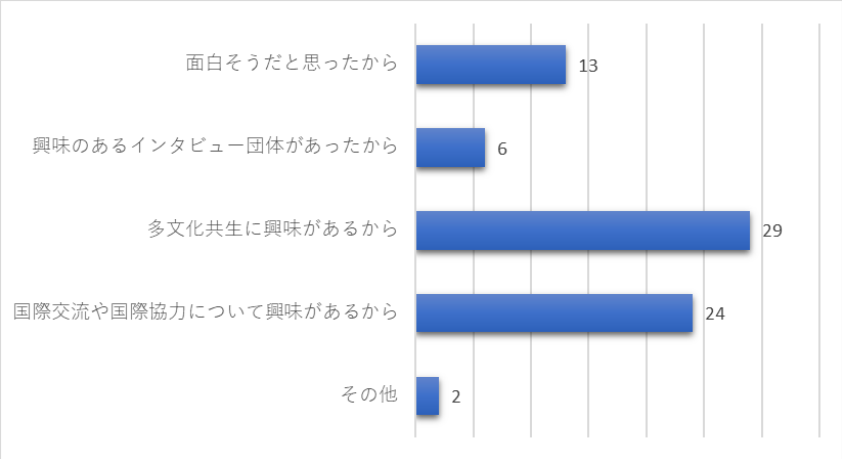
Q2.年齢を教えてください。




Q3.ご職業を教えてください。

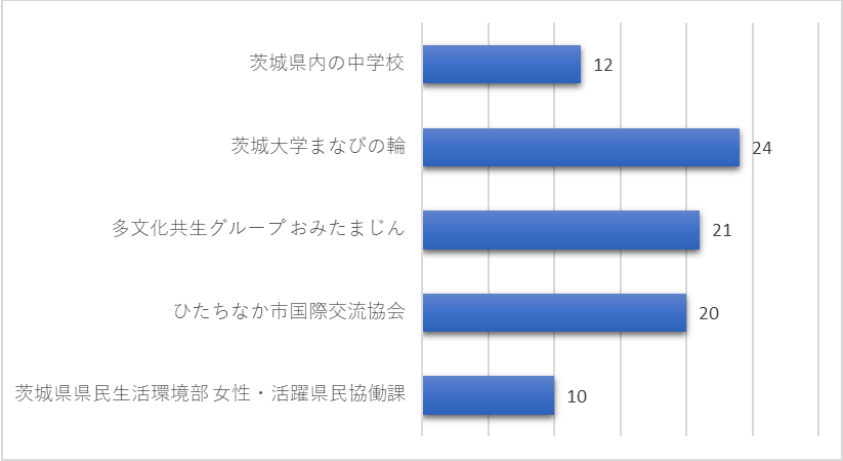



Q4. 講座を受講しようと思ったきっかけを教えてください。（複数回答可）

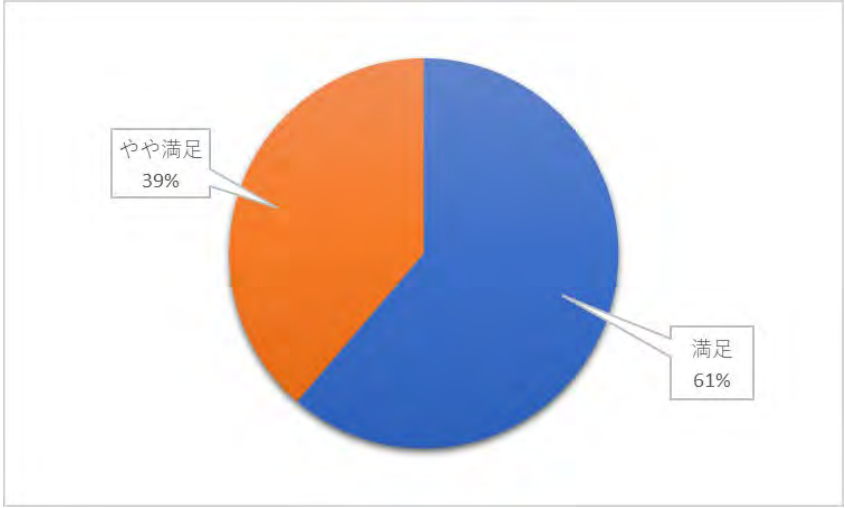


＜その他回答：自由記述欄＞
現在の職場で在留外国人とともに働いていることで、外国人との関わりに関心を持ったから。
自分の子どもが通う学校の外国人についてよく知るため。

Q5. チラシを見て気になった団体を教えてください。（複数回答可）




Q6. 本講座の満足度について教えてください。




Q6-2. 上記とした理由をご記入ください。（自由記述：抜粋）

・外国人への「支援」や日本語を「教える」ことを通じて、日本人が学べること、相互理解が促進されることや、共に楽しめることが良く伝わったから。また、広く県民の理解が深まることで、偏見や誤解を解消できることや、日本での生活に悩む外国ルーツ住民が相談できる窓口につながることで地域でより良い生活を送ることができるようになる架け橋になる団体の活動現場を見ることができたから。

・様々な団体の取り組みや学習者の声が聞け、自分が聞いたことのある団体でも興味をもって聞くことができたからです。

・ボランティアさんの高齢化などの共通の課題があるところや、日本語教室のスタンスの違いなど、いろいろとためになったから。

・今現在の県の状況がわかりました。また、取材に応じている方が、とても自然にお話しされていて、わかりやすく、共感をもつことができました。

・県内において在留外国人に対する様々な支援が行われていることが分かり、とても参考になったから。

・私立高校で教員をしていますが、外国人生徒への日本語指導について知りたかったため。

・茨城県でも国際的な取り組みが進んでいることが分かったり、これからの社会ではより多様性を大切にしていくことを学ぶことができたからです。

・どのような団体がありどのような活動をしているのか、まだどのような課題があるのかなどがわかりやすく提示されていた。また、茨城県の自治体としての取組みなどもじっくり聞く機会がないので参考になった。

・茨城県内の、様々な国際交流活動について初めて知ることが多く、特に「日本語を教える」というよりも「日本語を使って楽しむ」という考えのもとで活動しているという点がとても興味深かったから。

・多文化共生サポーターバンクについて知ることができたから。是非登録したい。

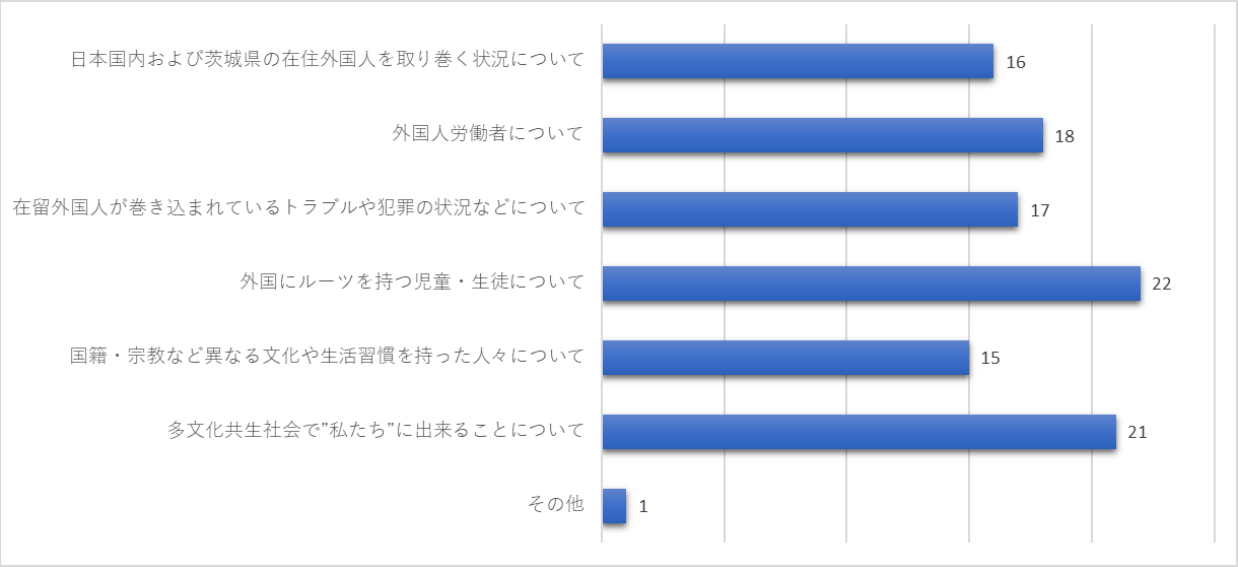
・茨城県内で外国人の方への支援を通して国際交流を行っている団体を知ることができたから。面白かった。

・オンラインという形態で、皆に開かれた講座を開いていただき有り難うございました。千葉県からの参加ですが、茨城県でこのような取り組みがされていることは知らず、情報収集の機会もなかったように思います。ありがとうございました。

・私は日本語教育には無縁の生活を送っている為、日本語教育とは単に日本語を教える為だけなのだと思っていたのですが、それが全て覆され、外国人への心のケアと地域ぐるみでの活動など、人と人との関わりという 1 番大切なことをするべきなんだ、とわかった為です。

・在留外国人本人や、関わっている人の話が聞けたから。自分が在留外国人と関わるうえでのヒントを得られたとともに、現状への理解を深められた。

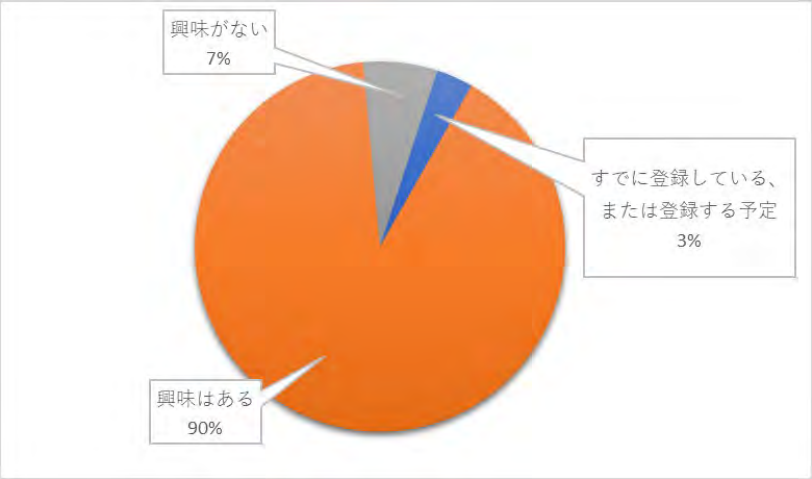
Q7.今後はどのような講座を聞いてみたいと思いますか。（複数回答可）




＜その他回答：自由記述欄＞

その他の団体・教室などで成功していると思われること。

Q８．多文化共生サポーターバンクに興味はありますか。




Q9.外国人に対する支援について、あなたはどう考えますか。（自由記述：抜粋）

・まずは、身近にいる外国人に興味を持ち、自分ができる範囲内で無理なく支援することが、お互いにとって負担にならず、お互いが楽しみながら、お互いの文化を知ることが一番いいのではないかと思います。

・日本が好きだ、日本に住みたいと思ってもらえるように支援していくことが大切だと思う。文化や価値観が違う分、様々な問題があるが、日本人も在留外国人もまずは相手を理解する努力をするべきだ。そして、日本ではマイノリティーともいえる外国人への支援は手厚く行うべきだ。外国人に対する支援はまわりまわって日本人に返ってくると思う。

・私たちが、同じ地域に住む外国人のことを気にかけ、困ったときに声を掛け合えるような関係を持てるようにしたい。

・動画でもあったように、やってあげている・教えてあげるという気持ちだと余計なプレッシャーがかかるし、相手の心も開けないと思います。そのため、一緒に学ぼうという姿勢で臨むことが大切だと思います。

・今は、幼い外国人の子どもとその保護者への対応支援に対して興味があります。毎日の生活となると、文化や言葉が違うということは、不安を持つ要素の１つにもなることも多いかと思います。地域や周りの関係する人が、多方面から物事をみること、誰にとっても良いわかりやすい環境を整えていくということが、広い意味の特別支援の考え方としても大切なのではないかと思います。

・今後、外国人が身近にいる環境になると予想されるが、そうした方と交流できる場があれば、積極的に自分から話しかけることができたり、関わり方を学んだりできると思う。

・支援を強化して行くことで日本や茨城県に来る外国人が増えると思うので、今はあまり外国人との交流はほとんどないけれど支援をしていくことで来日する外国人が増加し、様々文化にも触れることが私達にとってもできると思うし、外国人の人もより身近に日本の伝統や歴史にも触れてもらえることができると思うのでぜひ支援を強化していただきたいです。

・支援という言葉の意味について考えさせられました。支援というと、困っている人を助けるというイメージがありますが、ここで紹介された団体の皆さんが「助ける」ではなく「一緒にやる」という姿勢で活動をされていました。多文化共生の基本姿勢を学んだ気がします。

・難しいものだと思っていたが、同じ地域に住む仲間だという意識を持てばそこまでハードルが高いものではないという考えに変わった。大変興味深かった。

・外国人の立場になって、何を必要とするかを考えることが重要だと思う。例えば、書類等で難しい日本語で書いてあると理解が困難になるため、外国人向けにやさしい日本語で書くなどの工夫・配慮を積極的にすべきだと思う。

・対等な人間として、コミュニケーションをとったり、困っていることをお手伝いしたり、助けてあげる、という姿勢が支援に繋がっていくと考える。

・前提として、誰もが社会の一員として自分らしく生きる権利があるということへの深い理解が必要だと思う。

・今や外国人が日本にいることが当たり前になってきていることから、日本に住む日本人一人一人が外国人に対する支援を考えなければいけないと考える。誰もが住みやすい社会となるよう、思いやりを持って生活していくことを心がけたい。

・「教えてあげようでは続かない」という言葉に深く共感しました。

・教育支援はもちろん大切ですが、やはりそれだけではなく、人と関われるコミュニティの用意という支援も大切なのでは、と思います。日本に来た外国人の方はやはり孤独と感じる方が多いと思います。そういった環境の中で言語だけ教えて野放しではなくて、地域のひとりとしてその人が活躍出来るような場所、そして地域の人と交流できるような場所を用意することが大切だと考えました。

・元々、異なる文化的背景を持っている人であるということを念頭に置いた上で、対応しなければならない。もちろん日本では日本の生活の流れがあるけれど、お知らせを「やさしい日本語」やイラストを交えて、わかりやすく提示する、といった各々の工夫で解決できる点は工夫し、お互いに近づいていくような関係性を目指すべきだと思う。

・環境（職場、日本になぜ来ているのか、一時的に生活しているだけなのか）によっては、仕事以外に何かをする、日本の情報を積極的に得ようとする時間も意欲もない。そうした人でも日本の情報が得られるよう、得たいと思えるよう、日本での暮らしが快適で充実したものになるよう、外国人からの働きかけがなくても外国人への配慮が様々な場面でなされることを願っている。身近にいる外国人にいろいろ教えたいとは思うが、相手が欲していない場合に自分がどこまで深入りするか、迷う。支援をしたい、というより人として仲良くなりたいが、やはり言葉の壁により相手の気持ちが分からず、躊躇する。

Q10.本講座を受講した感想やコメントなどあれば自由にご記入ください。（自由記述：抜粋）

・ボランティアでここまで外国人のために何か活動しているということは、本当に素晴らしいと思いました。外国人のため、と書きましたが、人のためになるということは、つまり、自分のためでもあり、相互に得る喜びが大きいからこそ、ボランティアの方々が楽しんで活動されているんだなと感じました。私も、身近に暮らす外国人に、自分ができる範囲内の支援をさせていただいていますが、とても楽しく、得る喜びが大きいです。今後も続けていきたいと思います。

・ひとりひとりのお話が面白くて、どんな活動があるのかを知れた。在留外国人を支援する立場というよりも同じ地域の仲間、友達として接しているということを聞いて、すごく納得した。

・現場の話を伺うことのできる、貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。
今後も、同様の講座があれば、是非、受講したいと思います。

・各団体の話が興味深かったです。それぞれの地域にいる学習者に合わせて活動内容を熟考されている様子も伝わってきました。定期的となるとどうしても自分の都合と合わない時に、迷惑をかけてしまうかもしれないという不安から参加をしない判断をすることもあるので、いつでも自由に参加できるというコンセプトで活動をされているのは参加者の側からしてもオープンな印象をもつと思いました。ただ、運営側からすれば参加者の人数が毎回不確かであるため、適応力が必要とされると思います。その中でもそのコンセプトを維持されているのが素晴らしいと思いました。振り返りイベントもぜひ参加したかったです。(他のオンラインイベントに参加予定なのでできませんが)

・いろいろな現場の声を聞くことができて、よかったと思います。ありがとうございました。
・過去に多文化共生事業に携わっていたことがあり、興味を持ってみることができました。現在の様子もわかり、とても勉強になりました。自分自身、なかなか余裕がない時期なのですが、これから自分ができることを考えていきたいと思います。ありがとうございました。

・日本語教室のお手伝いや養成講座を経験してるものの、実際自分が教える自信がどうしても持てず尻込みしてしまいます。皆さんすごい！

・大学に求められる役割というのも多様化していると思いますが、こういう地域への貢献の仕方もあるのだと学びました。インタビューに出向いたりと、準備にかなりお時間を要されたと思いますが、大変有意義な内容でした。ありがとうございました。

・茨城県内のいくつかの日本語教室の現状について知ることができ、また日本語教育プログラムではあまり触れられることがなかった学校教育の中の日本語教育について見ることができとても良かった。さらに、姉の職場でもある茨城県国際交流協会について色々と知ることが出来たのでよかった。

・各諸団体との行政の関係、それぞれの諸団体運営の財政的側面などについても知りたいと思いました。国の法律等の整備に基づいて始められたという県の外国人支援に関する活動の状況と成果も知りたいと思いました。

・国際交流により興味を持ち、茨城県内で行われている外国人への様々な支援について調べてみようと思いました。とても勉強になりました。ありがとうございました。

・わたし自身はつくばに住んでいるため、近くの地域のことしか知らなかった。茨城県全体として、防災の多言語化をしている、という点が印象的だった。先日、地震があったように、今後また自然災害は十分起こりうる。そのために、マイノリティを取りこぼさず、互いに助け合えるような地域にしていく必要がある。またこのような機会があれば、参加したいし、家族や友人にも話そうと思う。

＜考察等＞

・アンケート Q6「本講座の満足度について」では、「満足」及び「やや満足」の回答が 100%を占め、「不満」及び「やや不満」の回答が 0%だった。

また、アンケート Q6-2「 上記とした理由」に対して、「茨城県内の、様々な国際交流活動について初めて知ることが多く、特に「日本語を教える」というよりも「日本語を使って楽しむ」という考えのもとで活動しているという点がとても興味深かった」、「自分が在留外国人と関わるうえでのヒントを得られたとともに、現状への理解を深められた」といった回答が見られた。

受講者には既に在留外国人支援に関わっている方、関わっていない方の両方がいることがうかがえるが、今後更に円滑なコミュニケーションを図るためにはどのように工夫したらよいのか、講師陣の生の声を聞くことによって、受講者の成長を後押しする機会を与えられたのではないかと考える。

また、県外からの受講者も一定数いたことから、“多文化共生”という言葉に対する注目度の高さも窺える。

・アンケート Q10「本講座を受講した感想やコメント」では、「国際交流により興味を持ち、茨城県内で行われている外国人への様々な支援について調べてみようと思った」、「これから自分ができることを考えていきたいと思う」といった回答が見られた。

これらのように、本講座を通して講座受講者の国際交流への興味・関心を高めることができた。また、在留外国人に対する支援に対して、「ハードルの高さや、言葉の壁などから難しさを感じていたが、講師陣たちの“助ける”のではなく“一緒にやる”という姿勢に感化された」という声も一定数あり、地域住民ができる在留外国人支援や多文化共生について、自身で考えることを促し、理解を深めることができたものと考えられる。

・アンケート Q7「今後はどのような講座を聞いてみたいか」では、「外国にルーツを持つ児童・生徒について」が一番多く、次に「多文化共生社会で“私たち”にできることについて」が多かった。

本講座で登場した茨城県内の中学校のように、在留外国人の増加で、「同級生が外国人」というのは、今や当たり前になってきている。しかし、現状は、文化や価値観の違いからどのように関わっていけばいいのか分からないといった声も多いので、早急に取り上げるべきテーマだと考える。

また、講座受講者に共通している部分は、外国人も日本人も対等な立場で共に地域社会の一員として暮らしていけることを切に願っている点にあり、相互扶助の姿勢が垣間見えた。

次回開催にあたっては、関心度が高い上記２つのテーマを中心に講座を組めるように、他機関や学内関係者との調整、企画内容について再考していく必要があると考える。

＜担当教員のコメント＞

社会連携センターからこの講座の担当を依頼されたとき、1 時間程度の講義をするようお願いされました。しかしながら、多文化共生について私が一方的に話すよりも、茨城県内での実践やそれにかかわる人達の語りを目で見てもらったほうが参加者にとってもイメージがしやすいのではないかと思い、今回インタビュー映像をまとめたものを配信することになりました。実は、私自身、インタビューデータを論文にまとめ、文字として公表することに違和感を持っていました。なぜなら、そのような方法では、インタビューで得られた知見は論文を読む層の人々の間でしか共有されず、知見を現場の教師や一般市民には十分には届けることができなかったからです。このような問題意識から、私はこれまで授業実践を映像作品にして公開してきました（例えば、瀬尾・瀬尾 2019）。そして、今回、茨城大学の公開講座で一般市民を対象にした映像による講義を担当でき、私の思いを実現できるものとなりました。そして、上述されている参加者のコメントからも在留外国人への支援に興味を持ち、一歩踏み出そうとしている姿を垣間見ることができ、非常にうれしく思っています。

2019 年 4 月の出入国管理及び難民認定法の改正を受け、今後日本に住む外国人の数が増えることが予想されています。今回この動画を見てくださった方々が少しでも在留外国人に対する支援に興味を持ち、そして一歩行動に踏み出すことができればと節に願っています。

参考文献

瀬尾匡輝・瀬尾悠希子（2019）「映像を用いた実践共有の課題と可能性―日本語中級クラスにおけるインタビュー・プロジェクトの映像化から」『茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究』2, pp. 87-90.

【資料８】



令和2年12月16日（水）「いばらき社会人リカレント教育懇談会」

# 茨城大学リカレント教育プログラム
# 令和2年度実績報告
## 及び
# 令和3年度の目標と展開

茨城大学社会連携センター
TEL：029-228-8413
e-mail：syougai@ml.ibaraki.ac.jp





1. 茨城大学リカレント教育プログラムについて

2. 茨城大学リカレント教育プログラム令和2年度実績報告

3. 茨城大学リカレント教育プログラム令和3年度の目標と展開

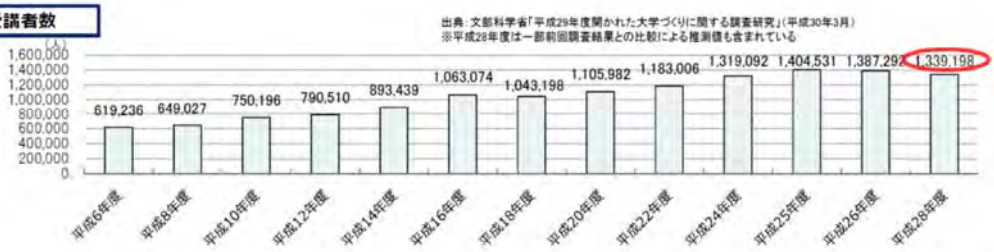
茨城大学 Ibaraki University

# リカレント教育の必要性

令和2年11月16日
全国国立大学生涯学習系センター研究協議会との意見交換会
文部科学省提供資料より抜粋

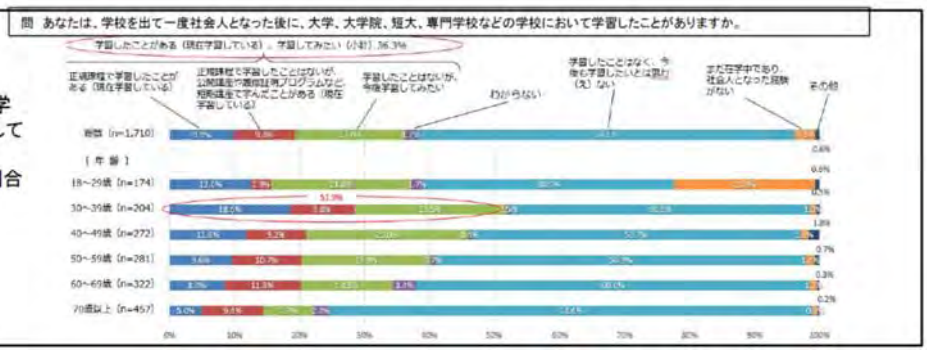
**大学公開講座の受講者数**

**約134万人**
（2016年）




**学び直しの実施状況**

社会人となった後も、学校で不学習したことがある人、今後学習してみたい人の合計は約36%。
年代別で見ると30代ではその割合が50%を超える。




出典：平成30年度生涯学習に関する世論調査





茨城大学 Ibaraki University

茨城大学の社会人向けのリカレント教育プログラムは３コースで構成。社会人の学び直しニーズに応えるとともに、人材育成を通じた地域創生をめざします。

① 誰でも１科目単位で自由に学べる**オープンコース（公開講座・公開授業）**
② 様々な専門分野のエッセンスを複数の科目を受講して学べる**専門コース**
③ 企業や団体の要望に応じて従業員育成プログラムをカスタマイズして提供する**カスタムコース**

| 個人向け　誰でも自由に学べる！ | 個人／組織向け　じっくり学びたい方に！ | 組織向け　相談に応じてカスタマイズ！ |
|---|---|---|
| **オープンコース** | **専門コース** | **カスタムコース** |
| 茨城大学の公開講座・公開授業の中から、どなたでも１科目から自由に選んで学べるコースです。従来よりも科目数を拡充しました。 | 体系化した科目カテゴリから選択して学ぶコースです。60時間以上の受講により受講証明が授与されるほか、コーチングスタッフによる受講相談の仕組みも。**自治体と協力したプログラム（職業実践力育成プログラム（ＢＰ）など）**に対応したプログラムの編成も検討中です。 | 企業や団体の従業員育成の支援を目的として、要望に応じて教育プログラムをカスタムメイドして提供します。茨城大学オリジナルの仕組みです。 |
| 申込方法：科目ごとに申し込み | 申込方法：受講者登録制 | 申込方法：各社内で申し込み受付 |
| 受講期間：講座開講期間のみ | 受講期間：１～３年を想定 | 受講期間：相談の上決定 |
| 基本料金：講習料 | 基本料金：講習料・登録料 | 基本料金：講習料・登録料<br>プログラム維持費 |
| | その他オプション等：<br>● コーチングスタッフとの受講相談が受けられます。<br>● 一定の受講により、受講証明が授与されます。<br>● ご要望に応じてカテゴリを新設することも可能です。（オプション・要相談） | その他オプション等：<br>専門コースのオプションに加え<br>● 説明会や報告会を企業様へ出張して実施します。<br>● 企業様へ受講状況をご報告します。 |

茨城大学 Ibaraki University

# 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)への対応状況

前期(第1Q～第2Q)　全面遠隔授業

後期(第3Q～第4Q)　一部対面授業を再開

| オープンコース | 専門コース | カスタムコース |
|---|---|---|
| 前期・後期ともに開講中止。 | 前期は開講中止。 | 前期は開講中止。 |





茨城大学 Ibaraki University

# 専門コース講座開講状況

Ⅰ. 茨城エコ・カレッジ(体験コース)

Ⅱ. 多文化理解パートナー育成講座

Ⅲ. 起業セミナー「あつまれ　起業家のたまごたち」

茨城大学 Ibaraki University

## 専門コース

### Ⅰ. 茨城エコ・カレッジ（体験コース）

環境問題についての興味を持ち，環境保全活動を進んで実践するリーダーを養成するための講座。修了者には，茨城県知事及び茨城大学長連名の修了証を交付。また，「茨城県地球温暖化防止活動推進員」に申し込む資格が得られる。

主　催：茨城県、茨城大学
開催方法：オンデマンド配信
動画公開期間：令和3年1月22日（金）
～2月12日（金）
講義数：7回
募集定員：100名

茨城大学 Ibaraki University

## 専門コース

### Ⅱ. 多文化理解パートナー育成講座

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）により、外国人労働者の受入が難しくなる一方で、在留外国人に対する支援が十分に行き届いておらず、在留外国人を取り巻く問題がさらに顕在化している。本講座では、茨城県内で在留外国人を支援する団体の活動を映像で紹介し，地域住民ができる在留外国人に対する支援について学ぶ。

主　催：茨城大学　　後　援：茨城県
開催方法：オンデマンド配信
動画公開期間：令和3年2月5日（金）
～2月26日（金）
講義数：1回
募集定員：100名

茨城大学 Ibaraki University

## 専門コース

### Ⅲ. 起業セミナー「あつまれ　起業家のたまごたち」

「若手起業家育成のための事業」として、地域社会で活躍する起業家・社内起業家精神の育成を目指し開講。受講者が、「ビジネス的な物事の見方ができるようになる」、「ビジネスに対する興味関心を持つようになる」ことを目標とし、ビジネスについて基礎的な事項から学ぶ。

主　催：茨城大学　後　援：茨城県教育委員会
開催日：令和2年11月29日(日)、12月6日(日)
開催方法：オンラインライブ配信及びアーカイブ配信
申込数：109名

茨城大学 Ibaraki University

## カスタムコース

### 連携協力講座開講実績

参加団体数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4団体

受講者数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24名

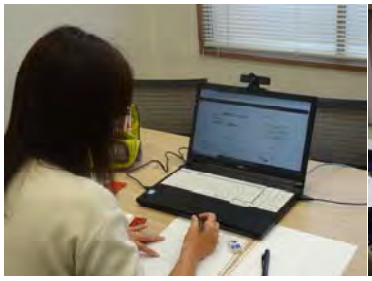
受講可能科目数・・・・・・・・・・・・・・154科目

受講科目数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18科目

## カスタムコース

### 受講者数

| | |
|---|---|
| セキショウリカレント教育プログラム | 13名 |
| 那珂市リカレント教育プログラム | 6名 |
| 水戸ヤクルト販売株式会社リカレント教育プログラム | 3名 |
| NTT東日本茨城支店リカレント教育プログラム | 2名 |



## カスタムコース

### COVID-19への対応状況

| 授業が対面式で行われる場合 | 授業が遠隔式で行われる場合 |
|---|---|
| ・各教室にて授業へ参加。<br><br>・一般学生と同じ空間で受講し、直接質問をすることも可能。 | ・社会連携センター内にて、大学が用意するパソコンで授業に参加。<br><br>・リアルタイムで受講し、チャットなどで質問をすることも可能。<br><br>・科目によっては、一般学生とのグループワークも実施。 |
| 共通<br><br>・社会連携センター受付において検温・消毒の実施。<br>・マスク着用・ソーシャルディスタンス確保・「いばらきアマビエちゃん」への登録を依頼。<br>・教室内の換気・消毒等の徹底。 | |

茨城大学 Ibaraki University

## カスタムコース　受講者面談より

### ①受講に当たっての期待や思い　⇒　大学で学べることへ期待は大きい

- 学びたい内容が明確になっていて、大学で学ぶことへの期待が大きい。
- 学生と共に学ぶことができるかなどの不安を抱えているが、それを超える期待を感じる。

### ②受講に至った経緯　⇒　上司の勧めなど職場の理解が大きい

- 上司が勧めてくれて、受講を申し込んだ。大変感謝している。
- 大学で学ぶ機会を頂けたことに感謝している。会社の配慮にも感謝している。

### ③受講科目の選択　⇒　学びたい科目があり、希望に応えられている

- 今までに学んだことのない科目を選択した。幅広い内容を学びたい。
- 自分が必要と思っている科目を選択した。（仕事だけではなく幅広く）





茨城大学 Ibaraki University

## カスタムコース　受講者面談より

### ④受講にあたって心配なこと　⇒　大学で学ぶことが不安となっている

- 事前知識が全くないこと。
- 学んだことをこれからどのように活かすかが課題と考えている。

### ⑤受講にあたって希望すること　⇒　対面授業を期待する一方オンラインを受け入れている。継続した学びの希望も。

- 対面での授業を心待ちにしている。
- オンラインの授業が心配であった。オンラインの授業は大変勉強になっている。
- このような学びの機会を継続させて頂きたい。興味のある分野を継続して系統的に学びたい。

### ⑥今後受講したい内容・科目等　⇒　「茨城学」、「地域課題」、「経営・経済」等の希望

- 「茨城学」を受講したい。オンデマンドでもよい。
- マーケティングや地域課題研究などの科目に興味がある。

## カスタムコース　受講者面談より

### ⑦受講後のこと（成果の還元・受講のための配慮等）

- 多くの社員が学べるようにしたい。私自身も努力する。
- 「報告会」がある。この資料作成も楽しいと思っている。

### ⑧その他

- リカレント受講生、学生、大学教職員の皆様との交流会とを希望している。
- 会社の期待に応えられるかどうかは心配だが、個人の満足度は高い。
- オンラインの講義は、新鮮で勉強になっている。対面の授業の再開も待っている。
- 同じ職場の皆さんに遠慮がある。勤務場所を離れることに気遣いが必要と感じる。
- 茨城で働くことになったので、茨城をよく知りたいと思っている。リカレントで学んでいる企業の皆様との交流を持ちたい。

※令和元年度受講生へのアンケート結果は別紙をご参照ください。





# 2. 茨城大学リカレント教育プログラム令和3年度の目標と展開

※本学が定める新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策のための活動基準に応じて、随時見直すことがあります。

茨城大学 Ibaraki University

## 令和3年度の目標と展開（オープンコース）

① 多様なニーズに応えられるような講座を開講する。

② 社会情勢を見据えた学びの提供を目指す。

※平成30年度撮影





茨城大学 Ibaraki University

## 令和3年度の目標と展開（専門コース）

① 新たな分野の専門コースを提供予定。

② 社会ニーズを捉えた体系的な専門コースを開講する。

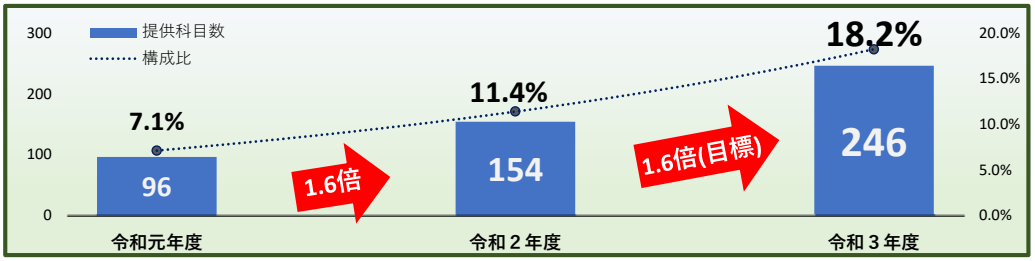
※令和元年８月撮影

茨城大学 Ibaraki University

## 令和3年度の目標と展開（カスタムコース）

### ① 企業・団体等からの多様な要望へのサービスを充実

### ② 提供可能科目の増加




### ③ 受講者同士の交流の機会を提供

※令和元年９月撮影

令和２年度茨城大学と連携協定先自治体との実務者間意見交換会　報告

１．趣旨・目的

社会連携センターが発足する以前の平成２４年度までは、地域連携推進本部が、大学間協定を締結している連携協定先の自治体担当者と近況の報告や意見を交換する場として「実務者間意見交換会」を開催してきた。

この度、改めて、大学間協定を締結している茨城県並びに県内１０市町村（阿見町、茨城町、鹿嶋市、高萩市、筑西市、東海村、那珂市、日立市、常陸大宮市及び水戸市）及び学部間協定を締結している県内７市町｛石岡市、大洗町、小美玉市、常総市、大子町、常陸太田市及び守谷市（うち、大洗町及び常陸太田市については、本学 COC 事業において連携)｝の実務担当者と共に、地域活性化のための連携活動をさらに進めていくための場として意見交換会を開催する。

連携協定先の自治体担当者に開催方法についてアンケートを行ったところ、半数以上の自治体が「オンライン（各自治体の庁舎からご参加)」とのご回答をいただいた。これを踏まえ、本年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大防止の観点や、with/after COVID-19 を見据えて、オンラインで開催を試行する。

２．日時・場所

日時：令和３年２月３日（水）　１３時３０分～１５時４５分

場所：オンライン会議システム「Teams」

3. 主催

主催：社会連携センター

4. 次第

司会進行：岡山社会連携センター副センター長

・開会挨拶（中村社会連携センター長）

・本学の紹介

（Youtube：国立大学法人茨城大学～学生一人ひとりが成長を実感できる大学）

・参加連絡票に記載されたアンケート（テレワーク・オンライン会議の実施有無）の承合

・３グループに分かれた意見交換会

グループ A「地域連携」

グループ B「ワーク・ライフ・バランス～女性活躍の視点から～」

グループ C「国際交流・多文化共生」

・３グループのファシリテーターによる意見交換概要の共有（まとめ）

グループＡ：岡山社会連携センター副センター長
グループＢ：佐藤教育学部教授
グループＣ：瀬尾全学教育機構准教授
・各自治体参加者からの感想発表、閉会挨拶（中村社会連携センター長）

５．内容

本意見交換会には、総計 29 名が参加し、内訳としては、全 18 自治体の内、8 自治体 11 名の実務担当者が参加した。本学側は、社会連携センター関係者、ダイバーシティ推進室、全学教育部門国際交流部門より、18 名が参加し、情報及び意見交換が行われた。

まず、テレワーク及びオンライン会議の実施有無については、資料に基づいて、岡山副センター長より説明があった。

次に、各グループでの意見交換においては、各自治体が実施した成功事例や抱える悩みについて情報交換され、また、大学と連携して何ができるか、行いたいかについても意見交換が行われた。概要については、以下に記す（詳細については、別紙記載）。

グループＡでは、主に、大学との連携に焦点をあて、今後の連携強化に向けて必要なこと等について意見交換が行われた。また、本学から、学生地域参画プロジェクトや iOP、リカレント教育プログラムについて紹介した。

グループＢでは、ワーク・ライフ・バランスの実現及び女性活躍の推進に向けた各自治体の組織内での取り組みと事業者向けの取組みについて情報交換が行われた。また、両取組みを推進する上で現在抱えている課題や大学への要望等について意見交換が行われた。

グループＣでは、各自治体が抱える悩みや困っていること及びそれらに対する取り組みについて情報交換が行われた。また、大学との連携強化に向けて何ができるかについて、意見交換が行われた。

最後に、各自治体側の参加者から感想を発表していただいたが、本意見交換会に参加したことにより、他の自治体の成功事例等について知ることができ、大学との連携強化に向けても参考になった、コロナ禍での連携強化には課題があるが、今後も検討していきたいとの多くのコメントをいただき、有意義な意見交換会となった。

別　紙

各グループで行われた意見交換の内容について

グループＡ：地域連携

自治体が、本学と協働で取り組みたい事業として、市町村の魅力を本学学生の視点から発見することや学生の力で発信することが挙げられた。また、既に取り組んでいる事業はあるが、自治体の事業やSDGs等に関して大学からの知識の提供を望んでいるとの意見があった。しかし、どのように連携していくかは検討中であり、コロナ禍では難しい点があるとの意見もあった。

次に、連携協定に基づいた活動や事業推進のために必要だと思うことについて、情報共有や協議が重要であるとの意見が多く挙げられた。また、事業の推進にあたって金銭的な補助が必要な場合は、連携市町村による補助金・負担金を活用することも検討事項のひとつという意見があがった。

本学側からの意見としては、学生の持っている活力は大学のもつ強みの一つであり、自治体からのイベント等の周知内容中に「学び」や「体験」等の学生側にもメリットがあることを示していただくと学生も集まりやすいのではないかという意見があった。また、リカレント教育プログラムや連携センタープロジェクトの概要や、ある自治体より若者からの意見が聞きたいという要望に対して学生へのアンケートを実施した事例の紹介があった。

グループＢ：ワーク・ライフ・バランス～女性活躍の視点から～

まず、対内的な取り組みとしては、女性活躍推進法に基づく特定事業主行動計画に即して実施し、アンケートやヒアリングにより女性活躍の推進を図っているとの事例紹介があった。また、テレワークや時差出勤等も推進はしているが、業務の属人化や環境の整備が課題となっているとの意見もあった。また、対外的な取り組みとしては、市内企業との連携やセミナーの開催、宣言の発出等の事例紹介が行われた。

次に、取り組みを進めていく上での課題については、情報発信の方法、周知を継続することや管理職や意思決定の場への女性参画の推進等が挙げられた。また、大学への要望としては、情報共有やニーズ調査への協力が挙げられた。なお、情報共有の内容については、特に学生が就職に際して職場環境で求めていることについて要望があった。

大学側からは、ワーク・ライフ・バランスについては、性別に関わらず働き方改革が重要との意見があった。また、様々な状況下での生き方や働き方について、学生がイメージできる場を作ることは大学の大事な使命であり、自治体と大学で共催して開催することも連携促進の一歩ではないかという意見があった。

グループＣ：国際交流・多文化共生

別　紙

現在、困っていることについて、各自治体より情報共有及び意見交換がなされた。日本語教室の運営方法については、ボランティア団体に依頼しているとの情報交換がなされた。なお、本学側より、ボランティアは「先生」ではなく、「同じ地域やコミュニティに属している仲間」となり、運営方法としては、コミュニケーションを通して学んでいく体制が理想であるとの意見があった。

また、日常的な国際交流を促す自治体が主催するイベントについては、ボランティア団体や国際交流協会が主催しているとの情報及び意見交換がなされた。さらに、非常時（災害時）の外国人に対する情報発信や大学との連携についても情報交換がなされ、本学側より、連携プロジェクトとして一緒に事業として行っていくことの可能性もあげられた。

最後に、大学に求めることや一緒に行いたいことについて、意見交換がなされた。多言語に対応した SNS の発信における連携や大学生のイベント企画や運営への参画、日本語教室への助言のための講師派遣等が挙げられた。

茨城大学と茨城県議会が相互連携・協力に関する包括協定を締結

茨城大学と茨城県議会は、このたび、相互連携・協力に関する包括協定を締結しました。今後、政策形成にあたっての調査・研究や議会を活用した学生の学修などの取り組みを推進していきます。

本学と茨城県議会は、これまでも、授業における県議会議長、副議長によるゲスト講義、キャンパス内での出前委員会の開催、「茨城の魅力を探究し発信する高校生コンテスト」における協働といった取り組みを連携して行ってきました。

今回の協定は、そうした活動を踏まえ、組織間の連携・協力をさらに深め、地域の課題に対応し、活力と魅力にあふれる地域づくりや人材の育成を進めることを目的として締結されました。

9 月 24 日（木）に茨城県議会議事堂で行われた締結式では、茨城県議会から森田悦男議長、伊沢勝徳副議長のほか、各会派の代表議員、また、本学からは太田寛行学長をはじめとする役職員が出席し、森田議長と太田学長がそれぞれ協定書にサインをしました。

森田議長は、「議会が県民の期待と信頼に応え、県政発展に取り組むためには、議案の調査や政策立案能力の向上といった、『議会力』の強化が重要であると考えてきた」と述べた上で、「大学との連携を通じ、その知的資源を生かし、各議員の専門性を高めていくことが重要ではないかと考え、大学との連携を模索してきた」と、包括協定に至る経緯を紹介しました。

また、太田学長は、「2015 年に公職選挙の選挙権年齢が 18 歳以上に引き下げられ、若い大学生にとって地域の議会の存在がより身近なものになった。学生たちには、立法機能を通じた地域づくりに触れることで、地域活性化志向を育んでほしいし、大学としてもこの連携を通じて、持続的な社会づくり、地域ぐるみの SDGs 達成にますます意欲的に取り組んでいきたい」と意義を語りました。

締結式終了後、本協定締結を記念して、太田学長が「SDGs と新しい茨城：産官学で共創する近未来」と題した講演を行い、議員や茨城県職員、茨城大学の学生・教職員などが聴講しました。太田学長は、茨城大学におけるサステイナビリティ学の研究・教育の取り組みと、それをさらに持続可能な開発・発展へと具体的につなげていくための構想と実践を紹介しました。その中で、SDGs の各目標に対する茨城県の課題も指摘し、それらを解決するための産学官の連携を呼びかけました。

茨城大学と茨城県議会は、今後、委員会等への大学からの有機者派遣、大学での講演、学生の議会傍聴や意見交換会などの連携事業を進めていきます。

筑西市と相互連携・協力に関する包括協定を締結

茨城大学と筑西市は、2020 年 12 月 22 日、相互連携・協力に関する包括協定を締結しました。

この包括協定は、地域の課題に対して学術研究及び行政における知見を活かした効果的な施策展開を図るとともに、次世代を担う人材の育成を通じて、魅力ある地域社会の構築を目指すものです。茨城大学においては、県内市町村として 10 番目の全学連携協定となります。

同日、筑西市役所本庁舎で行われた締結式において、筑西市の須藤茂市長は、「筑西市においても人口が減少しており、苦慮している。茨城大学には専門的な知識によってお力添えをいただき、より良い地域づくりに向けて相互関係を構築していきたい」と述べました。

また、茨城大学の太田寛行学長は、筑西市が米や梨などの全国有数の農産地であることなどに触れた上で、「時代は SDGs（国連の持続可能な開発目標）に向かっており、本学も今年から SDGs を視野に入れた地域づくりに取り組んでいる。筑西市の個性を生かしたまちづくり、このまちに住みたいと思える持続的なまちづくりにぜひ取り組んでいきたい」と、意気込みを語りました。

今後、両者の連携を強化し、より効果の高い施策の実施、若者の視点を生かした政策立案、関係人口の増加といった事業について、相談や専門的知識の共有、学生との連携などを通じて取り組んでいきます。

関連リンク

- 自治体との協力協定（https://www.ibaraki.ac.jp/local/lgovernment/）

# 令和２年度　茨城大学社会連携センターアドバイザリーボード意見書

＜１＞　令和２年度社会連携センターの活動・取り組みについて

①全体について

| |
|---|
| 新型コロナの影響で、大変苦労された１年であったと思います。余儀なく中止となったイベントもありますが、それでも短期間で感染防止策やオンライン開催の準備をされセミナーや講座を行われたことは素晴らしい成果であると思いますし、今後もそのノウハウは大きな資産として活用される事と思います。社会連携センターとて取り組むべき事が明確化された点も評価します。また、大学と自治体、団体との連携が着実に構築されており、「地域研究・地域連携プロジェクト」等のプロジェクトもコロナ禍でありながら成果を上げておられると評価します。特に「学生による地域参画プロジェクト」はアルバイト先がないなど難しい時期にもかかわらず、学生が自主的に課題に対して取り組み、地域社会がかかえている問題解決にもつながるとても良い取組みであると考えます。 |
| コロナ禍で厳しい状況の中、迅速に遠隔システムを活用しながら活発な活動がおこなわれたことを、高く評価します。<br>国立大学のミッションの再定義により、地域貢献型の大学という役割が明確化されましたが、COC+の中核として、13の教育機関を束ね、Ａ評価を得たことは、未来を先取りする地域国立大学の使命を充分に果たしたものと評価できます。「地に足の付いた学びをするためには茨城大学へ」という社会アピールをされたらよいと考えます。 |
| 新型コロナによる影響を受けてやむを得ず中止となる事業はあったものの、茨城大学における地域連携の基本方針に基づき、ウィズコロナ時代における新たな地域貢献の在り方も探りつつ多岐に渡る取組が行われたものと考えます。今後も、同方針のもと活動の充実に期待します。 |
| まず、コロナ禍という前例のない状況の中、ご苦労の連続だったことと拝察します。その中でこれだけの事業をなされたのは素晴らしいと思います。カラフルな事業計画の表は、とても明確で伝わりやすいと感じました。ウェブサイトにもこちらを掲載されるといいと思います。 |
| コロナ禍で活動が制約されるなか、新規事業の構築、継続事業の見直し等成果が出ていると思います。 |

**②各事業について**

【アントレプレナーシップ教育プログラム開始に向けての取り組み】

| |
|---|
| 起業家の数はその国の経済成長に大きく影響するため、起業家の育成は国全体の課題です。学生が在学中に起業することもあれば、会社勤めを経験した後で起業する事もあるように起業には様々なパターンがあるため、大学生にとって起業がより身近なものとなる取組みは、大変価値があると考えます。先に行われた起業セミナー「あつまれ　起業家のたまごたち」参加者から「軽い気持ちで参加したが、とてもためになった」という感想がありましたが、裾野を広く取りこのようなビギナー層を含む、多くの学生に起業について考える機会を提供していただきたいと思います。一方、同セミナーは曜日選定や時期に問題があったのかの参加者が少ない点を残念に思います。<br>現在、後継者不足によって廃業の危機を迎えている小規模事業者が数多くあり、中には街で人気の飲食店やニッチな分野に特化した優秀な製造業など消滅するのが惜しい小規模事業者も数多くあります。Ｍ＆Aというと大げさですが、優秀な学生やビジネスマンが(優秀な)小規模事業者を引き継いでいけば、後継者不足による廃業の問題の一部が解決されると期待しています。Ｍ＆Aなど幅広く学んでいただけたらと思います。 |
| 「ベンチャー起業立ち上げ数を競う」というような実利に執着せず、教育に軸足を置いた茨城県との連携による取り組みは、非常に好ましいものです。学生を対象にしたマインド教育は、特に早期からの職業倫理や美学の醸成という生涯に亘る仕事のあり方にも関わる重要な教育テーマと思います。４年間にわたるプログラムにすれば、就活時にも役立つと思いますし、生涯教育にもつながります。高齢社会化が更に進む中、将来的には「定年に伴って起業する（生涯現役化）」ことが常識となるかもしれません。そのおためにも、卒・修了生とのネットワークによるメンター制度の充実も有効でしょう。さらに積極的な推進を期待します。 |
| アントレプレナーシップ教育に関しての意義として、起業すること自体が目的ではなく、起業家的な考え方を育むことが目的であるというお考えに賛同します。今後の社会の変化の中で学生もその必要性を感じているのではないかと思います。また起業自体に関しても、上場を目指すようなスタートアップというより、コミュニティビジネス的なものへの可能性も見直すと大学のポジショニングにも合っているように思いますし、今後必要とされる分野だと考えます。 |
| 本事業とディプロマ・ポリシーが融合した人材が茨城県内を拠点に活動し、地域の活性化・未来づくりに貢献することを期待します。 |
| 設定した人財像の育成を目指し、鋭意工夫のもと随時改善を図りながら取り組まれていくことを期待します。 |

【地域連携に関する事業】

| |
|---|
| さまざまな取り組みがきめ細かくおこなわれていることを知り、頼もしく思いました。各大学ともしっかりと地域連携活動がおこなわれていると思いますが、ノウハウの構築については充分とはいえないのではないでしょうか。地域連携においても、博士を輩出するようになることが、これからの地域創生に有効と思いますし、実のある実績を生み出すことができると考えます。<br>リカレント教育については、今までは県や市町村による社会教育制度程度に留まり、主に各企業にまかされる部分も大きかったと思われます。私も企業に20年間勤務しましたが、教育の機会は昇任のための合宿訓練程度でした。大学教員になって、真摯な学び環境に置かれることになりましたが、「テーマを明確にした研究活動」と「自らの学びを、教える事によって省察する」ということは、非常にリカレントにとって有意義だと感じます。これからは、大学再入学、社会人の大学院進学を積極的に社会提案し、大学のプレゼンスを高めていただきたいと思います。 |
| 新型コロナの影響で中止等ありましたが、２０年度のリカレント教育はプログラムが拡充され、受講者の増加が期待されていました。まずその点を評価します。社会人のリカレント教育は通常、企業でのスキルアップのための専門知識の習得が一般的だが、個人の興味に応じて科目を選択できる点が茨城大学ならではの特徴であり、参加者にとっては時間の使い方や働き方を考える機会提供にもなっていると思います。カスタムコースは現在拡充している段階だと思いますが、今後は希望があった場合は、地域企業の連合体のような組織へも門を開いていただけるとより地域企業にとってありがたいことだと思います。 |
| 女性の地域参画セミナーや地域連携プロジェクト等、産学官による協力体制を促進するものであったと考えます。リカレント教育については、専門コースにおいて「環境」や「多文化共生」といった茨城大学ならではの取組が行われましたが、今後は、県民のキャリアアップやセカンドキャリアの形成に資する専門性の高い講座の設置を期待します。 |
| コロナ禍での計画・実施、ご苦労が多かったことと思いますが、オンラインまたはハイブリッドでのシンポジウムや講演等、学生からの反応とても良かったと伺っています。ぜひ次年度以降も継続していただきたいです。 |
| コロナ禍の中、多様なニーズにオンライン等も活用して対応されたものと評価します。 |

【企業・産学界との連携】

| |
|---|
| 報告書では、産業会議と大学本部レベルの事業が紹介されていますが、さらに多くの教職員や学生が、企業の社会イメージやブランド力強化のためにコラボできればよいと思います。国際競争力の強化、ダイバーシティ企業の育成など、これからの時代を強く生き抜くためには、生産技術や新技術開発だけではない多様な視点が必要です。インターンシップのあり方などを工夫し、次世代を担う大学生を積極的に活用していくべきと考えます。 |
| 研究室訪問交流会は、大学の有する「知」の還元を通じて県内の産業界を活性化するために、必要不可欠な取組と考えます。今後も研究室と企業等との架け橋となり、本交流会が契機となり社会や地域の課題が解決されることに伴い県内企業が成長していくことを望みます。 |
| 新型コロナの流行により、インターンシップ等の実施が難しかった面もあり、学生と企業の関りが薄くなってしまうのはやむをえないが、県内企業と学生との繋がりは何らかの形で行ってほしい。企業とのカスタムコースの取組みは素晴らしいがリーズナブルすぎる気も？ |
| 今後の連携事業テーマは産業界からのニーズを受けたうえで、とありますので茨城産業会議やパートナー企業からの要望に添ってということになろうかと思うが、大学独自に意見を吸い上げる仕組みはあるのでしょうか。 |
| 会合での活動報告に留まらず、本連携がリカレント教育の充実等につながることに期待します。 |

【自治体・地域との連携】

| |
|---|
| 茨城県議会との連携は学生にとって縁遠い存在である議員と接し、政策の立案過程を身近なものと捉える貴重な機会であると考えます。また議会の見学や地域課題について考える事で、将来的な地方議員のなり手不足問題解決の一助となることを期待します。個別に地方自治体と連携協定を結ぶのは手間のかかることだが､さらなる自治体との連携を期待します。県議や各市長と茨大生で、なぜ若者は街から出たがるのか、本当に就職したいと考える魅力ある企業はこの街には存在しないのか等をテーマにした本音のディスカッションを開催するのも面白いのでは。 |
| 県全域にわたる各自治体との連携は、茨城大学の強みと言えると思います。課題先進県ともいわれる茨城での地方自治体との様々な取組みは、大学の独自性を出していくためにも、もちろん学生の学びのためにも重要ではないでしょうか。今後もより連携を広げて行ければと思います。 |
| 県内市町村（16？）との連携協定を、かたちだけに終わらせず、それぞれ専任の教員を配置して、これからも報告会や報告書がまとめられることを期待します。 |
| 協定を結んだ自治体・地域すべてを対象でなく、より積極的な協定先を優先して実績を上げ、その成果を共有することでも効果が出ると思う。 |
| 大学と自治体等とのそれぞれの強みを活かし、具体性のある取組のもと魅力ある地域づくりが促進されることを期待します。 |

**③その他**

| |
|---|
| リカレント教育につきましては、周囲でも40代、50代、60代での大学院への進学が増えているように感じます（私もです）。今後の大学のターゲットを大きく広げる必要があるのではないかと思います。すでに取り組まれているとは思いますが、履修のしやすさや学費、ブランディング、また女性にとっての学びやすさなど考えてはどうでしょうか。フィンランドではベビーカーを押して大学や大学院で学ぶこともあるそうで、子連れで学べる大学にしていただけると素晴らしいと思います。（おそらく個別には受け入れていると思いますが、宣言することが大事） |
| 「地域」の意味を考えたとき、茨城大学にとっては茨城県のことをさすが、半数以上の他県から入学した茨大生にとっては出身県のことを一番に思い浮かべるかもしれない。茨城大学には隣県である福島や栃木出身の学生も多く、近隣県の大学も事情は同様と考えます。その点を考慮すると北関東または近隣県などある程度地域を広げた大学間で連携し活動する方が、メリットのある取組みがあるのではないでしょうか。その結果として、地元での就職に目を向ける学生が増える事を期待しています。 |
| 「センター活動報告」と「事業計画（５つの柱）」が一致していない部分があります。たとえば「リカレント教育」は独立した柱になっているようです。大学の将来を考えた時、「リカレント教育」と「アントレプレナーシップ教育」は、独立した柱として位置づける意味があると考えます。 |

＜２＞ **社会連携センターの今後の活動、大学および社会の中で果たすべき役割、そのために必要なことなどについて、ご助言をお願いいたします。そのほか、ご自由にお書き下さい。**

| |
|---|
| 昨年からのコロナ禍によりオンラインでの授業が一気に広がりました。大学・先生方とも、この間、相当なご苦労があったことと思います。一方で、大学によっては、今後コロナの流行が終息したとしても対面・オンライン授業のハイブリットを前提とする、ということで学生を集めているところもあります。今後は、県外から進学する学生も増えることと思います。こうなると、茨城県内での大学の立ち位置ではなく、全国の大学の中でなぜ茨城大学なのか？と考えて行かなければならないですね。当然ながら社連センターをはじめとして、地元とのネットワークの強さなど、多くの特徴があると思います。すでに検討されていることかとは思いますが、強味弱みなど整理し、強味を生かしていくこと、アピールしていくことでさらに魅力的な大学にしていけるのではと考えます。 |
| 大学の３つの使命である教育・研究・社会貢献は、本来三位一体で推進されるべきものと思います。特に社会貢献や社会連携は、社会的には、公開授業のように「大学によるサービス」ととらえられがちです。しかし、真に社会に役立つ大学の活動としていくためには、教育・研究の主要テーマと位置づけ、研究成果やノウハウの構築を目的化すべきではないかと思います。とくに超高齢化社会におけるQOLの向上は、大きなテーマと思いますし、全学の専門知識を集めて取り組んでいけば、先端的な大学として注目されると思います。社会連携センターは、タテ割りの科学技術に対して、生活技術というヨコ糸の機能を強化する役割を果たす重要なセクションであると思います。ますます意欲的な取り組みがなされることを期待いたします。 |
| 大学は「知の拠点」であり、「若者の多く集う場所」でもあり、今後地域における重要性はますます高まると考えます。茨城大学の「知」にアクセスしたいというニーズもあれば、とにかく若者にきて欲しいという商店街まで要望は幅広いと考えます。そのため社会連携センターには茨大生と地域社会が係わる機会を一層増やし、コネクトする拠点として活動していただきたいと思います。また、希望として、県内にも数多くある製造業中小企業、とくに規模は小さいながらも優れた技術を持つ企業も多くありますので、茨城大学の先生や学生がその様な企業を今まで以上により良く知るための「架け橋」となっていただきたいと思います。 |
| 社会の構造は、人口減少社会の進行とともに、生産性の向上とあらゆるモノの高付加価値化といった知識集約型社会に変化しております。社会連携センターには、教員・学生・企業・住民・自治体等多様な主体とのハブとなり、選択と集中の下、活力のある地域づくりに向けた取組の深化に期待します。 |
| 多くの学ぶ機会を提供して多様な人材を育成することにより、農林水産業、鉱工業、商業すべての産業がバランスよく存在する県としての持続可能性を高めて欲しい。 |

# 令和２年度　茨城大学社会連携センターアドバイザリーボード委員名簿

| | 氏名 | 会社名 | 役職名 | 任期 | 適用条項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 小瀧　理 | 助川電気工業株式会社 | 代表取締役社長 | R2.8.1　～　R4.3.31 | 内規<br>第３条<br>（１） |
| 2 | 蓮見　孝 | 筑波大学<br>札幌市立大学 | 名誉教授 | R2.8.1　～　R4.3.31 | 内規<br>第３条<br>（１） |
| 3 | 深澤　泰子 | 茨城県 | 政策企画部計画推進課長 | R2.8.1　～　R4.3.31 | 内規<br>第３条<br>（１） |
| 4 | 光畑　由佳 | 有限会社モーハウス | 代表取締役 | R2.8.1　～　R4.3.31 | 内規<br>第３条<br>（１） |
| 5 | 山路　薫 | 日刊工業新聞社 | 茨城支局支局長 | R2.8.1　～　R4.3.31 | 内規<br>第３条<br>（１） |